

郵政全労協 結成 前後

郵政全労協・外史

1978年～1991年の組織再編の歴史

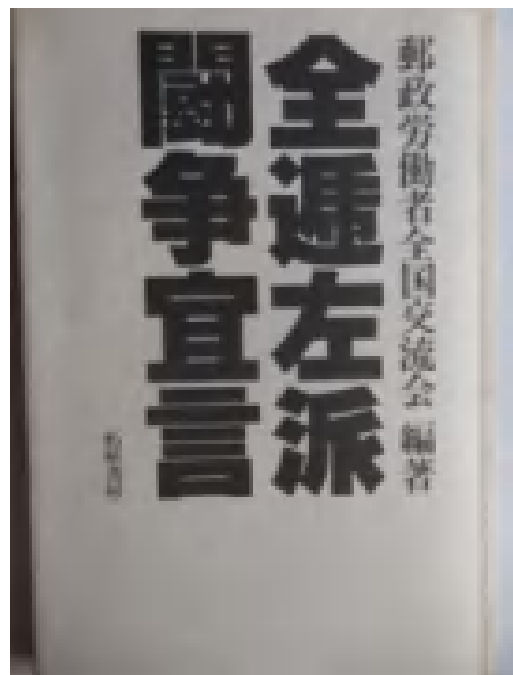
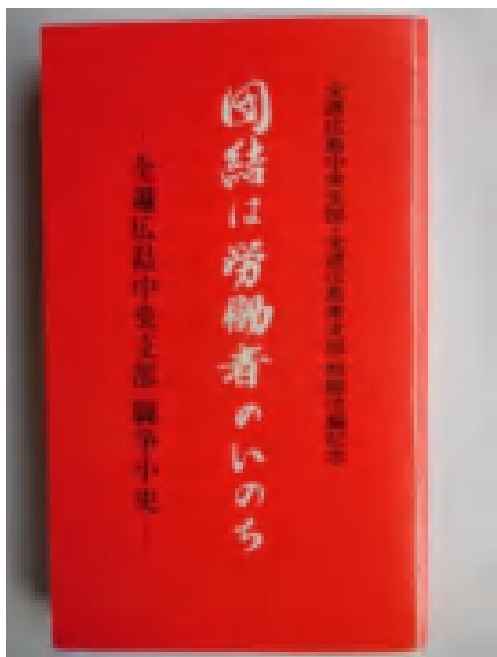


2015年9月29日
郵政ユニオン長崎、中島義雄

郵政全労協結成前後	目次	ページ
一、はじめに		1
二、全逓が独立労組か		1
1、左翼少数組合の源流と私たち		1
2、長崎の立場		2
3、小史の目的		3
4、4・28 反処分闘争に組織分岐の予感		4
三、前史		4
1、組織の流れと起点		4
2、全逓活動家の全国結集		5
3、スト権奪還と全逓		6
4、権利の全逓と二つの4・28		6
四、80年代の闘いと全逓内左派の結集		8
1、78年の全逓のスト脱落と78年年末闘争の背景		8
2、全逓活動家連絡会結成と機関誌「伝送便」の創刊		8
3、78年末の反マル生の越年闘争から正常化へ		8
、越年闘争と免職処分		8
、10・28 確認と特昇制度		9
、全逓の右転落とその影響		10
五、郵政全協が立ち、新たな闘いへ		10
1、全逓広島中央支部の闘いと執行権停止		10
2、郵政労働者全国交流会（郵政全協）の結成		11
3、長崎の転機		12
4、大阪郵政自立共生労働組合（郵自労）の結成		12
5、郵政全協の組織合宿と長崎の方針		12
六、右翼労戦統一反対の闘い		13
1、郵政全協、全逓の中執選挙に立つ		13
2、全逓埼玉全国大会で連合加入を決める		14
3、全国のほかの労組の流れ		14
七、郵政全協の飛躍		14
1、郵政全協決断のとき		14
2、長崎の転換、広島会議		15
3、郵政全協・拠点支部の闘い		16
4、全労協結成前の最後の全協の会議		16
5、郵政全協第7回総会		16
6、郵政全協第8回総会		16
八、労働界再編と三鼎立時代		17
1、労働界再編		17
2、独立労組結成		18
九、なぜ独立労組だったのか		20
十、なぜ反連合・全労協の風は止んだのか		21
十一、郵政労組全国交流会		22
1、全福郵労との出会いなど		22
2、九州内の左派全逓		23
3、郵政労組全国交流会		23
十二、郵政全労協の結成前夜		24
1、全国統一への動き		24

2、	三度の結成準備会から結成へ	24
	、郵政全協独立労組会議	24
	、全国統一へ郵自労へのオルグ	25
	、郵政全協結成準備会発足	25
	、第2回郵政全協結成準備会	25
	、第3回郵政全協結成準備会	25
3、	結成準備会前日	26
十三、	郵政全協の結成	27
1、	結成総会	27
2、	参加組合名と組織数	27
3、	第1期の執行部(幹事会)	27
4、	結成宣言とスローガン	28
十四、	その後の労組結成の流れ	29
	、京都郵政労働組合(京郵労)	29
	、広島中郵労組(広中労)	29
	、郵政大阪労働組合(郵大労)	29
	、首都圏3労組統一	30
	、千葉郵政労組	30
	、岡山・北の今田さん	30
	、郵政ユニオン東海地本	31
	、沖縄支部の結成	31
	、広島呉支部	31
	、岡山中郵支部結成	32
	、四国・香川支部の結成	32
	、そのほかで	32
十五、	郵政全協の具体的な闘い	32
1、	全協の原点、国鉄闘争	33
2、	4・28反マル生処分撤回闘争	34
十六、	全協大会の雑感	35
1、	郵政全協が全国幹事を出す	35
2、	全協全国大会と長崎	35
3、	全協全国大会と郵政ユニオン	36
十七、	ピースサイクル(PC)回想	36
1、	PCの始まり	36
2、	PCと全通	37
十八、	郵政全協議長と事務局長	38
1、	議長職について	38
2、	事務局長次第の組織	39
十九、	いくつかの思い出	39
1、	郵政全協の4人組	39
2、	谷本大岳さんのこと	40
3、	民主とはなにか	40
4、	郵政倉敷労組について	41
5、	郵産労のことで	41
二十、	全協の今後と諸問題	42
1、	全協運動と明日	42
2、	郵政ユニオンの組織統合問題と次への挑戦	43

二一、おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47



一、はじめに

この夏、2015年安保闘争を闘っているその最中、この30年来、ともに郵政労働運動を闘ってきた仲間の相次ぐ訃報に接した。お一人は静岡の池田国利さん（東海・浜松の郵政ユニオン初代委員長）で、もう一人は仙台の長谷川譲さん（郵政全労協の初代議長で郵政合同）である。ともに71歳で、私（中島義雄・郵政長崎労組初代委員長で初代郵政全労協副議長）と同齢で、普通にいえば少し早い「引退」である。心よりご冥福をお祈りしたい。

今年、2015年4月14日～15日、旧郵政労働者ユニオンのシルバー・ユニオンの全国交流会が長野県・昼神温泉で開かれたとき、「この組織の歴史を書くべきだ」という話が出たことと、このお二人との別れ。そして私自身も夏場に体調を崩したこともあって、このままでは郵政全労協の歴史も埋もれると思い、この小史を書くこととした。

郵政全協から郵政全労協の結成に関わった第一世代として、史実を記すが、正直、私には荷が重い。ましてや時代は激動であり、正史たりうるかは自信がない。そこから、あえて「外史」とした。

その理由は、第一に、書くべき人＝歴史を知り、有能な人（伊達、吉野、斉藤、棗、横山さんほか。個別には後ほど紹介）が他におられることである。

また第二に、全国の同志たちには、それぞれの素晴らしい闘いの実績があり、私がそれを代弁するのは至難である。

第三に、私自身が政治の中心から遠く離れた長崎の在で、1989年は郵便屋の現職で全通の支部長であった。そのことから東京などで開かれた重要な会議のすべてには出ているわけではない。事実、知らないことが多すぎる。とりわけ全国の全労協結成には出遅れたし、歴史を語る資格にやや欠ける。

それを前提として、私の記録と記憶をもとに、またいくつかの本などを参考にまとめたい。もとよりこれは全国性に欠け、不備もある。これらについては、関係者にご指摘いただき、後日、補正のうえ、この歴史本をさらに充実させて、後輩たちに託したい。

二、全通か独立労組か

1、左翼少数組合の源流と私たち

70年代を起点とするなら、日本における左翼少数独立組合は1970年2月の全福岡郵政労働組合と、同じく9月結成の三菱長船第三組合が源流である。その後70年代～80年代に、いくつかの少数派の労組が生まれるが、40年間前後の時間を経て、それぞれは解散するか、少数派のまま今日に至っている。（詳細は「少数派労働運動の軌跡（柘植書房）」を参照されたいが、ここでいう少数派独立労組とは多数が同盟に脱退して残った少数組合ではなく、自ら少

数で左に独立した組合である)。

私たちがいま所属する郵政産業労働者ユニオン（郵政ユニオン）も、これと同じ流れで生まれた。だとしたら、先輩労組と同じ組織戦略で闘うだけでは、郵政ユニオンも同じ運命で終わることとなる。私たちはいま 26 年目であるが、そう遠くないときに、これが待ったなしで問われる。

89 年の労働界再編時に生まれた郵政の八つの独立労組は、91 年に全国統一の労組協議会である郵政全労協へと再編され、2004 年には全国単一の郵政労働者ユニオンにかわる。そして 2012 年、全労協と全労連の枠を超えて、郵政産業労組（郵産労）と統一を行った。私たちはナショナルセンター三鼎立の枠を打ち破る組織統合とするが、しかし組織結成の原点(非全労連)からの変質だとの批判もある。

私は現段階での少数派が多数派をめざすには、少数派労働組合の統一が必要だと信じる。職場でともにストで闘うことは正しい。そして「2015 安保闘争」を国会前や地域で闘ったことも正しい。街頭や職場でともに闘う仲間であれば、運動は一緒にやれるし、同じ労組になれると思うからだ。

私たちは少数派至上主義で全労協の独立労組を作ったわけではない。総評解体・連合結成 = 国と資本と協調する「現代の産業報国会」に反対し、階級的に闘う労組として立ち上がったのだ。確かに最初は少数から始めたが、多数派をめざしている。この立ち位置は不変である。

2、長崎の立場

この歴史を書くにあたり、長崎がなぜ独立労組の郵政長崎労組（郵崎労）を作ったのかということで、自らの立場を明らかにしておきたい。70 年代の初め、私たちは全通長崎中央支部（以後、長中支部）で、全通内部では「宮崎派」と呼ばれていた。宮崎昇さん（全通長崎中央支部支部長、長崎地区副委員長）は自らを「ノンセクト・ラディカル」と称していた。これが郵政労働者全国協議会（郵政全協）長崎の母体である。党派別でいうと社会党系の社会主義協会（社青同）や、共産党系の民主青年同盟（民青）と異なる第三極の立場である。74 年、全通長崎の活動家で「レーニン主義研究会（L 研）」を作り、三菱長船の第三組合と交流があった。私も L 研に属し、全通長中支部では執行委員の法対部長を務め、15 年間の刑事裁判と、私自身が被告の 5 年間の刑事裁判や、全郵政との民事裁判や、いくつかの不当処分などを争う人事院闘争などを担っていた。全く実務専門の法対部長だった。

1970 年代の終わりころの長中支部は、1969 年の第一次反マル生闘争での 6 名の免職の処分撤回闘争と、被告が 4 名の 15 年刑事裁判を闘っていた。そして 76 年 5 月、第 2 次反マル生闘争とスト権ストがらみで、第三次の刑事弾圧がかかり、5 名(中島、末續、内川、松原ら)の逮捕から、免職必至という厳しい情勢下にあった。事実、そのころ全通横浜中郵支部では同様の事件で、執行委員の全員が逮捕され、刑事裁判と 7 名の免職が出ていた。私たちはこの両事件の担当弁護士から情報を得て、その詳細を把握していた。免職攻撃に対して長中支部は臨時大会で「処分阻止、ストライキ」と決議していた。

そんな 76 年秋、全労活などの主催で、第 5 回労働者交流集会（5 労交）が東京・品川公会堂で開かれ、長船に誘われて L 研も 5 人が参加した。しかし、そこで開かれた郵政産別の会議は空中戦に終始し、関東の人から全通派の長崎は「ひょつこころ谷の田舎者」とののしられた。そして、1978 年の全通産別の大阪会議（のちに全通活動家連絡会）に呼ばれたときも、私は反戦時代やこうした経験からも、「全国はやめたほうがいい」という立場であった。そのときは L 研トップの判断で、大阪会議への参加が決まり、井川登喜男さん（長中支部書記長で長崎地区労副議長）らが参加し、この全国組織に加わる。

その後も私は、この全国組織との関与を渋っていたし、無論、独立派ではなかった。そして 1988 年、いよいよ郵政全協でも組織戦が始まる。このとき、長崎は独立派へと転じたが、そのための意識変革には、二つの理由があった。

一つは、郵政全協の全国の仲間との「ともに全労協へ」という約束である。これなしには郵崎労発足はなかったし、いまの郵政ユニオン長崎もない。

二つは、諸先達の教えと言葉を信じたからだ。当時、労働情報・編集長の樋口篤三さんの書いた「右翼労戦統一反対」の「連合は現代の産業報国会」という言葉と、元総評事務局長で、社会主義協会の代表・岩井章さんの「全労協で国労防衛を」という言葉は正しいと思った。さらに西村卓司・長船労組副委員長が 88 年秋の「10 月集会」で述べた「座布団を裏返すには、立ち上がるしかない」という言葉に、強烈な思い出がある。

仲間との約束と、決起の檄文に心を動かされ、長崎は全通派から全労協の独立派へ転じたのである。だから長崎の全労協・独立労組論は、諸先達の組織論に源流があり、当然ながら長崎の発想ではない。

3、小史の目的

この小史は 1989 年 11 月 21 日の労働界再編（総評解体、連合、全労協、全労連の三鼎立）のおり、郵政の労働運動内において、全労協への参加をめざした人たちの足跡である。

89 年の反連合派の争点は、11 月の労働界再編時に、全通から離れて独立労組を作るべきか。あるいは、全通にとどまり反対派として闘うか、という組織選択があった。また時期的にも全国の再編＝連合発足の 11 月か、郵政内の再編時＝全通と全郵政の組織統合のさいとする議論もあった。

それまで 80 年代の私たちの運動は、86 年に郵政労働者全国交流会（郵政全協）が柘植書房から出した「全通左派闘争宣言」の本に詳しい。これをご参照願えればと思う。この左派宣言の本の趣旨を一口で言うと、右翼労戦統一反対、われわれのナショナルセンター推進としつつも、組織内の反対派＝階級的な労働運動として闘いつづけるという立場であり、全通を離れて独立労組を明確に展望する組織論はあまり語られていない。

本小史は主として 86 年から 89 年の労働界再編、そして 91 年の郵政全労協結成までの、ほぼ 5 年間の流れの記録＝歴史本である。内部反対派から独立派への飛躍はいかにして勝ちとられたのか。そのおりおりの会議や、若干の討論などをまとめたものである。

無論、当時、全国の仲間たちはすべて全通労働者であり、ここが原点であった。いかに労働界の再編といえども、未経験の独立派へ身を投じることはたやすくはない。10年～20年間と、ともに闘ってきた全通や地域の仲間と別れる辛さは、そのときがこないとわからない。

ましてや全通左派の郵政全協といっても、1970年代をそれぞれに生きてきた人たちの集まりである。党派もさまざま、各自に育った環境も違っていたことから、政治情勢が切迫してくると、事態はぐるぐると回転した。

事実、89年から90年の労働界再編時の組織決断のとき、状況が深まるにつれ、独立派にとっては、実に厳しい船出となる。全通の一労組活動家にとっては、理解の域を超えた結論も多くあった。この混乱と流れ、離合集散。これをなんとか一本の筋でつなぎ、現在の私たち＝郵政ユニオンの到達点を明らかにする。これがこの小史の目的である。

4、4・28 反処分闘争に組織分岐の予感

ただ、最初に私的な感想を述べると、以下である。

79年の4・28処分から一月後の6月2日、反処分闘争のために「全通活動家連絡会」の集まりが東京であった。長崎からは3人が参加した。会議で長崎は、長中支部が刑事弾圧で現実に闘っていることを報告し、「全通にとどまり、反処分闘争を」と発言した。しかし、被処分者の若者の熱気はすさまじく、長崎の思いは消し飛んだ印象だった。

私は、4・28処分以降、この全国の仲間とともに、郵政全協運動と一緒に闘っていけば、必ず「全通から離れることになるだろうなあ」という、ぼんやりとした予感がすでにあっただ。郵政全協の内々に、そうしたなにかしらの独立派の方向性や、雰囲気があったのか。またはこの4・28反処分闘争を通して、総評（全通）運動の限界が見え始めていたのだろうか。そして結果的にそれは当たってしまった。

三、前史

1、組織の流れ（歴史）と起点

最初、この歴史をどこから始めるべきか、少し迷った。

整理のために、組織結成の歴史順序をさかのぼる。

- 、現組織が2012年発足の郵政産業労働者ユニオン(郵政ユニオン)である。
- 、その前身は2004年発足の郵政労働者ユニオンであり、
- 、その前身は1991年の郵政労働組合全国協議会（郵政全労協）である。
- 、その前身は1988年の郵政労働者全国協議会（第2期郵政全協）
- 、さらには、1984年の郵政労働者全国交流会（第1期郵政全協）
- 、最初が1978年6月10日発足の全通活動家連絡会（全活連）である。

それ以前の郵政の全国産別組織参加の体験は長崎にはないから、小史を37年前の1978年から「前史」として始めたい。

だがこれだけでも混乱しそうなので、91年の郵政全労協（全労協・郵政労

働組合全国協議会)以前は一括して、郵政全協とご理解願えればと思う。ただ、郵政全協結成以降も郵政全協の組織は維持、並立しているし、機関誌「伝送便」や「奔流」も発行されていることをお断りしておく。

この歴史を書く前に、関係するいくつかの本に目を通した。一つは86年9月に出た「全通左派闘争宣言」(郵政全協編、柘植書房)であり、二つは85年10月に出た「全通広島中央支部闘争小史」である。

そしてこの二つに共通しているのは、「1978年の出来事」であることに気づいた。郵政労働者ユニオンの誕生の起点がここにあるということだ。

その一つは、郵政全協の最大拠点である全通広島中央支部の伊達工さんがこの年に支部長になり、以降の闘い、84年の「59.2反合理化闘争」での全通中央本部からの執行権停止攻撃と闘い、この自立した運動への道筋を立てられたことだ。

もう一つ、東京の吉野信次さん(東京南部小包郵便局、労働情報の編集委員の一人)たちが、同じ年に全国組織の結成を呼びかけられ、78年6月に「全通活動家連絡会」が立ち上がったのである。

全通が78春闘統一ストからの脱落、78年末の反マル生越年闘争と、大きく揺れているときだ。そんななか職場の足元の仲間たちの自主的発想から、郵政ユニオンの母体が生まれた。この歴史は、いまでも私たちに共有される。まさに記憶すべき年の、特筆すべき二つの出来事である。

2、全通活動家の全国結集へ

この世代の運動は激動に満ちていた。1970年安保や反マル生闘争の激しい闘いで、多くが逮捕、免職となり、新左翼諸党派も内ゲバなどで衰退する。労働運動も75年のスト権スト、78年の全通反マル生越年闘争敗北と4・28処分(61名の免職)などで事態は苦境にあった。そのことから郵政の階級的労働運動はいかにあるべきかが模索されていた。それが80年代前後の時代的背景であった。

78年6月10日、日ごろから闘う郵政労働運動の構築をと願い、全国各地で各種集会などに参加していた人々の22名が、大阪の国労会館に集まり、全通活動家連絡会を立ち上げる。きっかけは78年の春闘で全通が公労協の統一ストから脱落したことへの危機感からである。全通の階級的再生。この一点で仲間が集まり、全国組織が作られ、機関誌「伝送便」の発刊が決まる。われわれのスタートである。この枠組みはいまも続く。

いま思えば、この「全通活動家連絡会」と全国機関誌・「伝送便」なしには、今日の郵政ユニオンは存在しなかった。そしてこのつながりが、全国の左派活動家を強く結ぶ。そして1984年の郵政労働者全国交流会(第1期・全協)の結成から、1988年秋の郵政全協第5回総会での郵政労働者全国協議会(第2期・全協)への名称変更と、具体的な新たな闘いの決定で、全通・岡山全国大会の中執選挙立候補(7人が立つ)と、全通広島青年部の抗議ハンストなどが大会現地・岡山で闘われた。

そしてこの流れが、労働界再編時の全労協の旗の下に結集する郵政の独立労組結成、1991年の郵政全労協、さらに2004年の郵政労働者ユニオンの全国単一組織結成へとつながる。そして2012年の郵政労働者ユニオンと郵政産

業労組の統合での郵政産業労働者ユニオンのたちあげも、これなしにはあり得なかった。(これらはいまの運動の最も重要な課題であるが、今回の本史の目的ではないので深く言及しないが、最後に私見として少し書いている)。

3、スト権奪還と全通。スト脱落～反マル生闘争の背景

労働者のスト権は固有の権利である。これは国際社会（ILO）の労働法のイロハのイである。しかし、当時、日本の3公社5現業の国営・公営の事業体（国鉄、郵政、電電など）は、争議権保障の労組法が適用されず、公共企業体等労働関係法（公労法）が適用されていた。全通はその公労法17条でストを禁止され、これが郵政の労使関係のねじれの元であった。

全通や国労などの公労協の要求は「スト権奪還」であり、75年に全国でスト権奪還闘争を闘った。戦後最大の、否、日本史上最大の統一ストであった。公労協86万人がこれに参加し、当時20万人の全通も8日間・192時間のストを打ち、全国の1686支部、のべ39万9290人がストに突入した（75年12月、全通発行の「スト権奪還」から）。しかしスト権は取れず、公労協や総評は敗北する。

これに追い打ちをかけたのが、77年5月4日に出された最高裁の全通名古屋中郵判決である。公務員のスト禁止を合憲として、ストをした全通労働者に郵便法79条（郵便に従事する者が、殊更に郵便の取扱いをしないときは1年以下の懲役に処す）を適用して、刑事罰を科すことができるという判決がでた。これで郵政はストでも順法（業務規制）闘争でも、刑事弾圧や免職ができるという法的根拠ができたことになる。（ちなみにこれは法的に言えば現存している）。

それまでも郵政は、この全通のストを違法だとして、多くの刑事弾圧や行政処分をかけてきた。文字通り、全通運動はこれとの闘いであったといつてよい。当時の全通長中支部が、全通本部法対部の資料で作成した全通の刑事裁判一覧表では、1956年代から1977年までの21年間で、86件が起訴され、被告人は185人である。いずれも春闘でのストや反マル生闘争での職場での紛争事件である。免職の総数は正確に把握していないが、78年の反マル生闘争時に言われたことは、自殺者200名。免職者200名だとされていた。

そんななか78年末の全通運動最大の闘い、「怨念の17年」の年賀状を飛ばした反マル生越年闘争が闘われ、それにたいして1979年4月28日に、郵政の報復処分がでる。東京・全通の青年労働者58名（全国は61名）へ免職処分が発令され、全通運動はスト権ストの勢いを失いつつ、その年の10月28日、労使正常化の確認を締結し、屈辱的な協調路線へと転落していく。

4、権利の全通と二つの「4・28」

全通は過去、「権利の全通」と呼ばれてきた。権利とは働く人を守ることをいうが、また同時に労組のそれでもある。では全通はなぜそう呼ばれるのか。またそれはいつからか？だ。

戦後労働運動は産別会議で始まる。全労働者の組織率は5割を超える唯一のナショナルセンター（総同盟も参加）であった。しかし、おりからの東西冷戦や朝鮮戦争の始まりを期に、占領軍（GHQ）とアメリカは民主化（労組

育成)から、左派排除の攻撃へと変わる。またそれと並行して、産別を共産党の主導だとして、内部から民主化同盟が各労組にできる。その結果、1949年に全通も左右の二つの組織となり、民同派(宝樹派)は正統派全通を名乗り、産別派は統一派全通となるが、正統派全通が多数となる。全国の他労組も同じであり、こうした各労組が集まり、産別を脱退し、ナショナルセンターとしての1950年7月11日に総評ができる。だから全通も総評も、産別内の右派の第2組合として生まれている。

この間、すべての労組にレッドパージがかかり、1949年8月11日に郵政でも1万8000人を超える人が「容共派」というだけで、解雇されていく。産別会議はこうしてつぶされ、1950年に解散する。こうしてみると1989年の労働界再編=連合発足と国鉄10万人の人員整理、1047名のレッドパージと同じ歴史をたどっている。

全通は1958(昭和33)年の春闘で、全国577局で時間内食い込みの職場大会(実質ストライキ)を闘う。これに対して郵政は、郵便法79条違反(故意に郵便物を取り扱わない場合は懲役刑)という条項で、刑事弾圧をかける。またこの争議責任を問い、1958年4月28日に中央本部三役をふくむ7名の解雇、2万2478名の処分を発令する。一度目の4・28である。

そして郵政は、公労法4条3項(労組役員は職員でなければならない)を適用し、解雇三役を抱える違法な全通とは団体交渉はしないと、団交を拒否する。国労も前年に同じ攻撃と闘うが負け、解雇三役を交代していた。全通は団交権再開闘争=3・6協定無締結と物溜闘争を一年半も闘い、ついに勝利し、解雇三役を守り、団交権を獲得する。のちこの悪法はILOの勧告もあり、削除される。大きな闘いの勝利であった。

全通のもう一つの闘いは、1960年の年末闘争で、非常勤の本務化闘争を闘う。非常勤労働者も参加するこの闘いで、ついに全通は1万8000名を超える非常勤の本務化を勝ち取る。この数は全国の非常勤労働者の9割であった。

全通はその他、いくつも公務員としての権利や、労働者としての権利闘争で裁判に勝っているが、権利の全通は、この二つ(団交権獲得闘争と非常勤本務化闘争)を大きな成果として、全国に権利のために闘う労組(権利の全通)と認知される。闘う労組の尊称である。

そして、全通は長く続く郵政の全通差別、解体の攻撃(マル生攻撃)の撤回を求め闘いに決起する。1978年の反マル生越年闘争で、全通労働者の復権をめざすが、郵政は1979年の4月28日に、全国で61名の免職、解雇を含む8000名の処分をだす。いうところの4・28(よんにっば)処分だ。二度目の4・28であるが、全通は1991年、処分撤回闘争の終結を決め、裁判を継続した人7名を除名処分として、この闘いに幕を引く。除名裁判は原告が全通に勝つ。

ともあれ、全通は一度目の4・28反処分の闘いで権利の全通と認められ、二度目の4・28反処分闘争の放棄で、権利の全通の栄誉を失う。二度の4・28。このように全通の始まりと終わりが、ともに同じ日(4・28)の大量処分にあることに、(たんなる歴史の偶然ではあるが)あらためて郵政の攻撃の執念と、闘いの大切さを知る。以上が概略の「前史」である

四、80年代の闘いと全通内左派の結集

1、78春闘スト脱落と78年年末闘争の背景

78年春闘で全通は、前年の名古屋中郵判決を受けて、「刑事弾圧の回避」を口実に、公労協の統一ストから脱落する。これは驚きだった。4月27日、わが長崎中郵もスト突入の予定だったが、指令27号が出て、ストは直前に倒れた。78年7月4日から新潟市で開かれた全通第31回全国大会では、スト脱落の敵前逃亡で大激論となる。中央本部のトップ＝石井・保坂体制は続投となるが、一転して年末には反マル生闘争で、刑事弾圧覚悟の闘争方針が決まった。右に左に揺れる全通は東京タワーと揶揄された年であった。これが越年闘争の発端であり、全国で年賀を飛ばしてでも、本部が中途半端にやめられなかった背景である。良くも悪くも全通の歴史を変えた年であった。

2、全通活動家連絡会結成と機関誌・「伝送便」の創刊

1978年6月10日、全通のスト脱落を危惧し、全通の階級的な再生を願う、全国の9地区、22名の全通活動家が、大阪の国労会館に集まり、「全通活動家連絡会」をつくる。

このときの参加者は東京（吉野、斉藤）、兵庫（中塚）、広島中郵、備中北、千葉、愛知、京都、大阪、長崎（井川ら）であり、これが郵政全協の始まりである。私は不参加で当日の参加者のすべてを書けない。

そして、一月後の7月30日に、記念すべき「伝送便」第1号が創刊される。この結集体は、労働情報などが開く10月集会や、労働者交流集会への参加者などを基本にした集まりが元であった。中身は党派＝組織ではなく、個人＝労働者としてであり、それぞれは全通の活動家の参加であった。

このときはまだ反マル生越年闘争も4・28処分や10・28確認も出ていない。その意味では、いち早く全通運動の右転落を予見し、この全国会議を招集された吉野さんら指導部の方々の感性に驚きをもつ。まさに慧眼である。全通の変質を前に、全通内左派を自称する私たちも、その深い流れのなかに、存在が問われていたのだ。長崎はまだその危機意識もなかった。

そこで全国の全通活動家により、全通活動家連絡会が旗揚げされ、78年7月に機関誌・伝送便が創刊される。これが私たちの歩みの始まりである。この機関誌は36年後のいまも月刊誌として続き、現在438号となっている。

3、78年末の反マル生の越年闘争と正常化

、越年闘争と免職処分

75年のスト権スト敗北から3年。全通は「怨念の17年」という旗を掲げ、全通差別、人権無視の労務政策の変更を求めて、反マル生闘争に挑む。

11月に闘いが始まり、全国規模の指名ストでの休暇闘争（休暇請求書を出し、承認なしの欠勤闘争）や業務規制（順法闘争）が続くが、全国で1000万通を超える滞留郵便物が出るが、12月に入っても決着がつかず、全通の伝家の宝刀だった「越年闘争」となってしまう。当時は、郵政や国の「やらせ」

という論もあったが、冷めすぎだと思う。要求が経済的ではなく、中途半端では妥協が難しい闘いであったこと。また反差別の現場の怨念が強かったことなどから、闘いは全通本部の思惑を超えて拡がり、越年したのだ。年を超え元日となり、年賀状が家庭に届かない異常な事態となる。

全通にとっては伝家の宝刀でも一度抜いてしまえば、ただの刀である。「年賀状を元日に配らない」という圧力に、これまで郵政は譲歩してきたのである。元旦がくれば宝刀もなまくら刀と判ってしまった。しかも、12月31日と1月1日の間には、天と地ほどの開きがあることを正月になって郵政の労使は知らされる。郵政も全通も国民の強い非難を浴び、1月4日、全通は1月下旬までの休戦を決断し、業務の正常化（年賀状配達）へと動く。だが休戦とは名ばかりで、闘いは二度と再開されなかった。これが郵政労働運動史上たった一度きりの、年賀状飛ばしの越年闘争の経過である。

郵便労働者以外には理解されないと思うが、年賀状は特別である。反合理化、抵抗闘争の全通活動家であっても、この時期は「仕事できてなんぼ」の世界である。職人気質と笑われるかもしれないが、反マル生闘争で年末の31日に年賀状の配達準備ができていない職場は異様だった。さながらこの一月間の職場は「解放区」であったし、また元旦には「やった」という達成感もあったが、反面、経験のない事態に踏み込む畏怖を伴う緊張感があった。

そして休戦からわずか3か月後の79年4月28日に郵政は反マル生闘争への報復処分を発令する。4・28処分である。しかしこの処分はこれまでと異なり、闘いの指導部＝専従者・役員ではなく、極めて政治的なものとなる。総評の中軸である全通の闘争性を破壊するための特異な処分であった。

一つは、全国の免職61名中の58名が全通東京に集中したことだ。業務規制闘争や休暇ストは全国で打たれ、長崎中郵も3度の休暇ストを打ち、200名を超える処分者が出たが、減給処分が最高だった。

二つは、その免職者の多くが、20歳代の若者であったことだ。全通最強の闘争力を誇る東京地本と、それを支える現場の若手活動家を狙い撃ちにした処分であった。見方によれば、全通も了解した東京の若手活動家のレッドページでもあった。そのころ免職は事前に名簿が全通に示され、労使双方で協議をしていた。4・28の裁判で全通本部の石井元委員長もその趣旨で証言しているし、私も以前、郵政局レベルで免職だとされて、これを現実に体験している。

私感だが、70年代の国労や動労の反マル生闘争や春闘での順法闘争への市民の怒りが、埼玉・上尾駅の暴動（総評などではこれは計画的なものだとの説もあるが）となったとされるが、もうひとつ、この全通の越年闘争への国民の怒り。この二つ闘いの結果が、その後の公労協の戦術の後退、総評崩壊の遠因と思う。闘いの正当性はいまも昔も譲れないが、国民の支持がなによりも大事であり、その点では力及ばず！だったと思う。

、10・28確認と特昇制度

そして、4・28処分から半年後の79年10月28日、全通と郵政は労使関

係正常化の「10・28 確認」を結ぶ。全逓は、郵政に「二度と違法ストはしない」と約束し、郵政はこれまでのスト処分による全逓労働者の賃金カットの「実損を回復」(特別昇給で旧に復す)を行う、としたものだ。そしてのちにこれが郵政の側からは「全逓差別の解消」とされ、全逓本部からは「反マル生闘争の成果」だとされた。当時、私たちはこんなもののために身体を張ったのではないと激怒していた。

この郵政の 4・28 処分で、全逓は免職者や全国の被処分者(数万人)の救済という新たな財政問題を抱えたことから、実損回復という郵政の方針転換に、渡りに船とばかりに乗り、郵政との労使関係正常化へと向かう。これが右転落の始まりである。

実損回復は、労務政策の転換ではあったが、その救済手段=特別昇給制度が、次には新たな差別を生むという両刃の剣となる。現場では、全逓差別という根本は未解決のままであり、なによりも 4・28 処分を解決しないままの正常化は、許されない裏切りと映った。当然これは、その後大きな禍根を残す。10・28 正常化確認は見せかけのそれであった。

、全逓の右転落とその影響

最大の問題は、この郵政マル生闘争からの全逓の撤退が、郵政内にとどまらず、80 年代の国鉄分割民営化 = マル生攻撃へと連動し、さらには日本全体の労働運動の後退への引き金となった点で、罪深い全逓の正常化であった。

その証拠に、全逓が求める正常化の条件 = 郵政の労務政策の変更は、10・28 確認から 5 年後の 84 年 11 月 4 日である。郵政がようやく「全逓との対決方針を転換」し、全国の郵便局へ「柔軟な労務管理の指針」を指導として出すのである。(大原社問研、労働運動史年表から)

全逓は 82 年の愛知県蒲郡市での全国大会で、30 年総括を行い、路線転換をなす。具体的には、事業の効率化では反合理化を捨てて、事業協力の事後対処方式(抵抗をやめ、問題があれば話し合う)へ転換する。職場での対応(戦術)も変え、違法ストと反マル生闘争から撤退し、協調路線へと変わる。いわば 5 年間、全逓は協調主義か否かの郵政のテストを受けていたのだ。

その間、郵政は、全逓のいわゆる反対派支部の支部長や書記長を狙い撃ちにして、支部の外へ強制配転を行い、反対派支部の多くは解体される。また、現場では抵抗を続ける活動家 3 名に分限免職処分をかける。秋田・大曲局の須藤伸さん、千葉・船橋東局の桜沢敏夫さん(非全逓)、鹿児島東の牟田実さんである。いずれも全逓本部は個人の責任とした。桜沢さんは人事院で勝利し復職するが(のち退職)、残る二名は処分撤回がならなかった。

また一方、84 年 1 月に電電公社が民営化され NTT となり、全電通もさらなる平和協定を結ぶ。また、この年に国は国鉄分割民営化の閣議決定を行い、国労を除く労組も平和協定を結ぶ。時代は大きく転換していくのである。その起点は確かに 4・28 処分に見える。

五、郵政全協が立ち、新たな闘いへ

1、全通広島中央支部の闘いと執行権停止

それから5年後の1984年、私たち全活連（のちの郵政全協）の新たな闘いが始まる。全通広島中央支部の反合理化闘争で中央本部が支部の執行権停止攻撃をかける。

広島はいまま昔も私たちの最大拠点である。当時の全通広中支部や広島東支部であり、現在の郵政ユニオン中国地本がそうである。この体制はいつからできたのか。「全通広島中央支部闘争小史」によると、78年7月の支部大会で伊達工さんが支部長につく。同じく仲間だった佐々木哲さんが書記長でコンビを組み、それ以降、長い闘いが展開される。これが広島の全協運動の中心であり、それを末綱善章さん（広島中郵）や谷本大岳さん（広島東）の3本の矢が、多彩な人材として広中支部を支えていた。

1984（昭和59）年2月、郵便の輸送方式が、それまでの鉄道便から自動車便へと変わる。一般に「59.2 合理化」と呼ばれて、鉄道郵便局がなくなる。郵便局でも「深夜勤導入」などで、労働条件の変更＝合理化がかかる。全通広中支部（伊達工支部長・600名）はこれと闘い、残業協定締結拒否戦術をとる。これに対して2月2日、全通中央本部は伊達執行部に執行権停止の制裁（指令28号）をかける。2月4日、ともに闘ってきた全国の仲間たちが、急きょ広島に集まり、対応を協議した。仲間の家で、広島の仲間たち10数名ほどと夜を徹して話し合った。大激論であった。

伊達支部長ら広島全活連の仲間は執行権停止に怒り、この際「独立労組だ」という論が強かった。しかし、長崎は「出る時は一緒」という立場で説得し、独立論は見送りとなった。その後、広中支部も「機関決定には従う」という「確認書」を提出し、2月20日に執行権停止は解除された。

いまま、伊達さんと話すと「あのときに出ていれば…」となる。多分、伊達さんにとっては、生涯にとっても乾坤一擲の決断のときだったのだろう。その芽をつぶしたのだから、長崎もまた全国も責任が重い。伊達さんはいまも「永遠のしこり」だといわれる。私にとっても厳しい苦渋の会議であった。

さらにこの広島会議は全国へも大きな影響を与える。1991年にできる郵政全労協は、その後の複雑な組織事情により、広中支部が独立労組結成に間に合わず、郵政全協最大の拠点組織を欠いたままの発足となったからだ。

2、郵政労働者全国交流会（郵政全協）の結成

その広島の深夜会議からわずか一週間後の1984年2月11日、大阪・堺市の臨海ホテルに集まった全国の200人を超える全通労働者の熱気によって、郵政労働者全国交流会（第1期・郵政全協）が立ち上がる。本当に会場いっぱいの人だった。長崎も3名が参加した。私の経験では、そのころ郵政産別の全国会議で、これほどの人が集まったことはなかった。これは広島への弾圧を危惧した全通内良心派の結集だったのだろう。

そして大切なことは、人の数だけでなく、この組織名からもわかるように、それまでの「全通活動家連絡会」からの組織的飛躍であり、郵政内における労働運動の一翼を担う組織をめざす、全国結集だったのである。しかし、郵

政全協にはおりから進む「右翼労働戦線統一反対」というスローガンは掲げられてはいたが、全通から離れ、独立労組という展望はまだ見えていない。ともあれ、広島会議からこの郵政全協の結成へと向かった一週間の流れは、全通内反対派から、自立した運動体への自覚をもたらした貴重な時間だった。

3、長崎の転機

この84年2月、長崎の私にはもう一つの転機があった。1969年9月以降闘ってきた長崎中郵の刑事裁判で、2月29日に長崎地裁で判決がでる。判決は有罪だったが、支部や原告はこれを控訴せず、15年裁判が終わったのだ。

これは私にとっても重大な環境の変化だった。この15年間、月に一度の公判で計100回に及んだ。その間、東京のトップレベルの弁護士4~5人と100回の政治討論や、裁判実務協議を重ねる合宿は、私にとって生きた学校だった。長崎は相次ぐ刑事弾圧などで、東京の弁護士だけでも10人を超える人との出会いがあり、私自身も76年の第3次刑事弾圧のとき、あの砂川判決で有名な伊達秋雄弁護士の力で刑事起訴を免れて、免職を回避した経過がある。

同時に、支部も裁判闘争という重圧から解放された。この15年間、私にとって裁判は最優先の闘いであり、逃げ隠れできない時間であった。私は休暇のすべてを法対部活動に使った。今思えば、私には3人の子供がいたが、一度も運動会に行っていない。無論、入学式や卒業式もない。当時の活動家は、自宅で家族と夕食を食べることを活動家失格と批判する日常だったからだ。

ともあれ4人の被告にとっては命を削る闘いであったが、ともに反マル生「150日闘争」を闘った責任として、支部の300名も裁判を力の限り支えた。この間の経過は、全通長崎中央支部史「処分は俺たちの勲章だ」(井川編集長)に詳しい。裁判という縛りがなくなった私は自由となった一方で、L研の事務局を任せられ、全協運動に接近する。2月4日の広島会議、2月11日の全協発足大阪会議と出かけ、全国へと気持ちに向かう。これが私の転機となる。いま思うと、この84年2月は大変なときだったと回想される。

4、大阪郵政自立共生労組(郵自労)の結成

正常化を歩む全通は、1984年7月4日の全国大会(四国の高知市開催)に、韓国労総を招請した。当時韓国は、民主化を弾圧する軍事独裁国家であり、この政府と協調する韓国・郵政の御用労組の招請ということで、全通内でも反発が出た。郵政全協の仲間で、全通大阪の城東局の仲間たち9人が、この招請に反対して、全国大会で議場の壇上へかけ登り、抗議した。その後、彼らは全通から無期限の権利停止の処分を受ける。そしてさらに87年7月7日、6名が全通から除名され、1988年7月24日、大阪郵政自立共生労働組合(郵自労)を結成する。これが郵政全協内の独立労組の最初だが、いわゆる右翼労働戦線統一問題の組織分裂=独立労組結成とは異なる事例である。

5、郵政全協の組織合宿と長崎の方針

1987年2月6日～8日の3日間、郵政全協は組織討論の合宿を大阪の国労会館で開いた。14地区、32人が参加し、郵政全協としての組織方向性を決める重要な合宿討論となった。

しかも、この合宿は、それまでの郵政関係だけの会議とは異なり、当時、右翼労戦統一反対の旗を振っていた労働情報の樋口篤三編集長と、大阪電通合同労組の前田裕晤さん、さらに東京東部労組の足立実さんらを講師として招いての合宿であったことだ。この3人は、いち全通活動家だった私にとっては、まさに雲の上の存在であり、見るも聞くも驚きであった。思えば、郵政全協組織としての新組織建設を正面で討論した初めての合宿であったし、組織的には大きな飛躍と転機であった。

会議の中で、「長崎の組織方針は？」と問われて、私は「全通長中支部 300名を守る責任がある」として、新労組を否定した。全通残留、内部反対派として生きると返答したのだ。これに対して三氏は「長崎の方針は袋小路だ」と口をそろえ、私は完膚なきまで叩かれた。私は納得できないままに長崎へ帰った。しかし、当時のメモでは、辛い議論だったが、また「このままではいけない」と実感した合宿で、私の心を洗ったのも確かだった。

六、右翼労戦統一反対の闘い

1、郵政全協、全通の中執選に立つ

88年3月12日、郵政全協全国運営委員会（12人）が京都部落解放会館で開かれた。私のメモでは初めて「独立の方向性が見えた会議」と書いている。郵政全協事務局の報告では「全協は支部三役クラスで全国に25拠点があり、この全国ネットで組織戦を闘う…」と報告された。

横道にそれるが、このときのメモである。幹事の横山喜一さん（全通東京貯金支部）が「郵政全協の全国の仲間は一つ・・・」と発言した。そのころの少数派は「俺が、俺が・・・」の世界であり、他党派や隣の人とのわずかな違いを理由に、排他的な言動が多かった。今は信じられないが、私の目の前で乱闘まであったのだから。みんなが自分の正当性を譲らなかったなか、この横山発言は、私の心のなにかをとらえた。その後、私は彼にいくつも学んだ。彼は私と同じ歳なのに、はるかに落ち着きのある大人だった。闘いの経験と勉強の度合いが違ったのだ。

引き続き4月23日に開かれた郵政全協の全国代表者会議では、7月の全通岡山大会で、本部中執の役員選挙に、対立候補として郵政全協が出る事が決まる。立候補は7人が予定されたが、三役には伊達、井川、棟棠が立つとなる。長崎はこの会議を欠席した。理由は長崎の郵政全協のトップが役員選挙立候補に反対し、全協離脱もふくめ混乱していたからだ。その夜電話で、吉野さんから決定を聞いた私は、井川辞退を伝えた。

「長崎立たず！」の報に、6月10日、伊達さんと吉野さんが長崎へオルグに飛んできた。二人は「長崎なしの中執選挙では郵政全協もない」と迫った。

このオルグには長崎全協のトップが参加せず、その場は結論が出なかった。しかし、その後の長崎の討論で、全協長崎は立候補を決め、全通長中支部も井川推薦擁立を決める。いわば支部公認の中執選挙の対立候補だった。これは全協長崎の転機であり、私たちと長崎全協のトップとの別れでもあった。だから郵崎労は全協トップの二人を欠いての旗揚げとなる。組織分岐ではこうしたトップの離脱はよく起きる。専従者は少数派独立労組へは動かない。これも教訓である。

88年7月7日、全通・岡山大会が開かれる。この大会に合わせて郵政全協は第5回総会を岡山市で開く。これは全協としても組織結成後最大の転換点の総会となる。まず名称をそれまでの交流会から協議会と変え、組織が一体的に強化され、具体的な闘いも始まる。

その一つが全国大会での中執選挙への立候補である。大会での投票の結果は、代議員400人のうち70数票を獲得する。郵政全協としては全国大会への初登場であったが、健闘したとされた。全国全通組合員数に置き換えると3万人を超えたからだ。また、全通広島青年部は大会期間中に、会場現地でテントを張り、ハンストで闘い、反対の声を上げた。

この総会の意義は、中執選立候補が決まり、「いまジャンプのとき」とされたことだが、私たちが単なる反対派ではない。全協としては「全通は死んだ」という共通認識が語られた。こうして第2期全協が動き始める。

2、全通・埼玉全国大会で連合加入を決める

89年9月5日、全通は埼玉の全国大会で連合加入を決めた。加入賛成320票、反対80票であった。私たち長崎も6人の支部の仲間を現地・埼玉に派遣し、右翼労戦統一反対を書いた支部の機関紙である「日刊・唐八景」のピラまきを行った。このための費用は、支部の仲間の30万円のカンパ(一人1000円)によるもので、支部内での反連合が根強かった証拠だが、全国大会決定という事態で、全通内の右翼労戦統一反対の組織内の闘いは敗北した。しかし、このときも、郵政全協としてピラまきなどは展開したが、全国全協組織が統一して動く情勢にはならなかった。全通活動家連絡会からほぼ10年の闘いと組織建設が結実しないまま、郵政全協は総評解体・連合発足という時代の波にのまれていく。

3、全国のほかの労組の流れ、

ちなみに他労組の再編である。日教組は89年9月の全国大会で、連合加入賛成240票、反対82票で加入を決議した。なお反主流派の23都道府県の県教組と高教組は欠席しており、のちに全労連へと流れる。また自治労は89年8月の全国大会で、賛成830票、反対161票の圧倒的大差で加入を決める。国労も、89年9月の全国大会で全協への加入をようやく決議するが、二か月後には連合発足という状況下では、ときすでに遅しであった。現に9月9日には全協が結成準備会を立ち上げていることを思えば、国労とても情勢には追いついていない。

七、郵政全協の飛躍

1、郵政全協決断のとき

89年、総評の終わりが近づき、連合発足の時計が確実に回り始める。郵政全協はいかにあるべきか。議論は進まず、組織論も分かれた。独立労組で全労協へ参加すべきか、否か、である。

89年1月21日、郵政全協の全国代表者会議が東京で開かれた。ここで組織方針の意見は三分解した。一つは独立派で宮城、兵庫、大阪(城東)、長崎、広島東。二つは全通残留派で広島中央、岡山備中北、大阪(郵自労以外)である。もう一つは中間派で、東京ほかの地区であった。少ない組織でも、曲がり角には必ずこのように分解する。これは組織の必然であり、また教訓でもある。

かくて11月の労働界再編・連合発足時の郵政全協全体としての全労協参加は決まらず、ただ、翌2月に郵政全協の東西合宿を開くことだけが確認され、東は東京で、西は広島で開催と決まった。そして郵政全協の全国組織の一体性はこのとき失われる。

しかし、組織としては全通から出る地区も残る地区も、戦略としては「内外呼応」であり、独立の時期は「二段、三段式のロケット方式」とすることで内部に時間差を認め、組織の決裂を回避し、当面、郵政全協は維持された。

2、長崎の転換、広島会議

89年2月11日、郵政全協の西日本合宿が広島市の広島女学院大学で開かれた。長崎は全協13人中12名が車三台に分乗し、広島会議に参加した。非常に寒い日であった。この大学での会議は、あまりの寒さとテーマの重さで、息詰まるほどの辛い討論となった。郵政全協の議長で全通広島中央支部の伊達支部長が、郵政全協が中執選など組織的闘いを決めた岡山での第5回総会を受けて、「一事不再理。第5回総会の前には戻らない。腹をくくってこの閉門をくぐりたい。それができなければ、郵政全協のこの10年はなんだったのかとなる」と決起を提案した。経過から言ってこれが当然だった。

ところが、この郵政全協の第5回総会の議長を務めた、同じ広中支部の佐々木書記長が、これを批判し、「100や200でなにができる」と反論した。広島中郵全協の分岐であった。これが、広島中央の独立を2年も遅らせた一因であり、全協内の対立・内紛の引き金ともなる。私は広島全協の中では、佐々木さんを信頼していただけに、余計に無念さが残った。

ともあれ、この発言で会議全体が不穏な空気となったが、長崎が独立宣言を行い、佐々木書記長に反論した。長崎はひと月前の1月に、13名の長崎全協会員の総意として独立を決めており(全部から連名の新組合加入署名を取り、最低13名は組合員がいた)、淡々と独立を宣言できたのだ。

そして全通広島東支部の谷本支部長がこれに続き、「これまで私は広中とともにあったが、これからは長崎と歩む」と、独立労組を宣言し、西日本全協の

分裂の方向がはっきりとなる。谷本さんには名言が多いが、このときはことさら感動した。

郵政全協の中で、「長崎と広島は兄弟」とよく言うが、このときのことを指す。これが広島会議の思い出だが、この日の会議も辛く、長い二日間であった。しかしこの合宿の会議と討論があったからこそ、私たち長崎は独立労組を作ることができ、全国組織の郵政全労協もできたのだと思う。長崎にとっては、まさにこの日が、郵政ユニオンの起点だった。

3、郵政全協・拠点支部の闘い

いよいよ決戦のとき、89年の秋。全逓内の郵政全協の拠点支部はどう動いたのか。89～90年の各地の支部大会の流れである。

、**長崎中郵支部**は、89年10月15日に支部定期大会を開き、中島支部長が反連合を提起し、決議する。以降、翌年5月までの半年間に、二度の臨時大会や、全組合員による一票投票で、反連合派が勝利を続ける。結局、連合会費未払いという戦術をとったが、支部の執行権停止は出されず、90年5月27日に「制裁なき独立」となる。

、**広島東支部**も、谷本を支部長として闘い、11月19日に臨時支部大会を開き、「連合反対で無事乗り切った」が、しかし12月には全逓中央本部指令で全逓広島東支部は、執行権停止処分を受け、4月に郵広労が立つ。

、**多摩西支部**は、10月31日に支部大会を開き、全労協加盟を決める。そして11月15日に全逓中央本部から執行権停止を受け、組織戦に入り、12月11日に郵政多摩合同労組結成となる。

、**仙台**は、12月2日に郵政合同労組を旗揚げする。

、**広島中央支部**は、10月1日、定期大会を開くが独立の方針は出なかった。

、**岡山の備中北支部**ほかの拠点支部も独立労組としては立たなかった。

4、全労協結成前の最後の全協会議

総評解散を目前に「広島中郵立たず」の情勢のなか、89年9月23日に郵政全協全国運営委員会が東京で開かれ、組織討論がくり返された。広島中央が全逓に「残る」ことを明言し、重ねて内外呼応での闘いを確認した。これが全労協結成を前にした秋の、郵政全協最後の土壇場の動きであった。

5、郵政全協・第7回総会

89～90年、全労協参加をめざした独立労組結成と、組織決戦を終えた秋の90年9月23日に、郵政全協の最初の第7回総会が東京で開かれた。

独立労組側からは「全協不要論」も出たが、4・28反処分の裁判闘争継続などの重要な事項をふくめ、組織的には以下を決めた。

- 1) 郵政全協は幕を引かない。
- 2) 副議長5、運営委員5人体制をとる。
- 3) 全協10年の総決算として、この1年を闘いぬく。
- 4) そのうえで、第8回総会で総括をする。

- 5) 全協の信頼、決めたことはやる、言ったことは守る。
 - 6) 全協はまともな運動を追求し、新労組に合流する。
- などが確認され、組織は継続された。

6、郵政全協・第8回総会

91年10月5日、予定されていた郵政全協の第8回総会が注目されたが、当日、総会ではなく急きょ運営委員会に切りかえられた。討論でも独立問題や「4・28 反処分闘争」のありかたで紛糾した。ともあれ、次回の総会を翌年2月に開くことが決まった。

そして92年2月15日、ようやく総会が開かれた。独立派と全通派の両者とも、経過を棚上げして和解した。また、全通が4・28 反処分闘争切捨てを決めたなか、私たちも独自の闘いとして、「4・28 を共に闘うネットワーク」を結成し、闘いの継続を決める。こうして、郵政全協は独立労組や郵政全協結成前後からの内部対立を回避し、組織存続を決め、危機は抜けた。会議では厳しい議論が続いたが、当時、全協からの離脱を公言していた独立派(長崎と広島東)を止めたのは、棟棠浄さん(郵多労)であった。そのとき長崎は全協からの離脱を決めて会議に臨んでおり、彼が止めなければ、確実に郵政全協を離脱していたからだ。

八、労働界再編と三鼎立(ていりつ)時代

1、労働界再編と組織方法

1989年11月21日。総評が解散し、民間連合と統合し、官民統合の連合ができる。世に言う右翼労戦統一である。80年代からこれに強く反対し、運動を続けてきた私たちにとっては、鼎の軽重を問われる重大事となる。まさに、私たちは「なにものであるのか」であった。

しかし、89年12月9日に旗揚げした反連合・非全労連の全労協(50万人)は少数派であった。1989年に藤井昭三(朝日新聞記者)が書いた「連合の誕生」には、3鼎立状況を、「一強、一弱、一問題外」と揶揄する連合幹部の言葉を「おごり」として批判しつつも、ある種、現実とも指摘している。

私たち郵政全協も公称1000人の組織力だったが、最終的には足並みが乱れ、それぞれの地域や全通内の組織事情で、各自がバラバラに独立労組を結成することとなり、全国組織(郵政全協)として全労協への加盟ができなかった。独立派も実際独立したのは、郵政合同(仙台)と、郵政多摩労組(東京、多摩)だけだったのだ。

本来ならば、全労協結成まえの89年の夏までに、まず郵政ユニオンの全国の組合を一つ作る。そして各地がそれに支部形式で合流するのが一番簡単である。組織的にもそれがわかりやすく、法的手続き、労組規約、その他の複雑な手続きも不要だ。ただ、全通を脱退すればいいし、一人でも可能だ。また組織人数としても増えやすいのだが、その戦術は、当時、全協内部から「中

中央官制的な「ミニ全通」と批判され、まとまらない組織事情があった。民主的労組と多人数の獲得は、いまなお解決できない命題である。

ということで郵政全協は、拠点ごとの独立労組という最も困難な方法をとった。結果は見る通りだ。このことはいまも忸怩たる思いだ。ただかりに最初から全国一本化の「ミニ全通」方式だったならば、いま生き残っているかどうかは、また別の問題だが。いまこれは独立・民主派だった仙台の的場さんに、逆な意味でお礼を言いたいものだ。

組織戦に話を戻す。全国組織としての郵政全協の組織争奪戦。その結果の郵政全協結成は、労働界再編＝全労協発足から一年半も遅れて、全国の反連合の熱気も覚め、政治課題ともなりえない状況下で進行した。昔からいう「鉄は熱いうちに打て」という格言を忘れた組織戦略であった。事実、郵政全協は全労協結成大会の日（89,12,9）に、郵政全協の全国の代表者会議を同じ東京で開きながら結成大会にも参加していない。長崎の郵政全協としても、全労協をめざしながら意識も行動も伴わず、全国からはるかに遅れていた。

2、独立労組結成

労働界再編の時期に全労協の独立組合を作ったのは以下の6組合である。

、郵政合同（宮城）

全労協結成直前の12月2日、仙台の郵政合同が30人で発足した。郵政全協の中では一番早く、全労協労組を作ったのである。まさに有言実行。その組織力に驚いた。彼らの周囲に電通合同などの独立労組（のちの東北全労協）がすでにあり、その影響での結成となったのだが、さすがだった。その流れが、その後の全国の方角を決める。大会議案書も活版刷りで、きちんと準備されてははっきりと闘いが見えた。郵政合同には鹿又分会という拠点があった。10数名の小さい局だったが、ほぼ全員が郵政合同で、残業協定（3・6協定）締結権を持っていた。これは郵政全労協でも唯一の拠点分会で、郵政合同の力を示す存在だった。

、郵政多摩合同労組

11月15日、全通多摩西支部が執行権停止をうける。いま思えば、全労協加盟を支部大会で決めての、まさに正面突破の正規戦だが、この闘いを契機に、12月5日に郵政多摩合同労組（郵多労・13人）を立ち上げる。全国も全通多摩西支部の執行権停止は知ってはいたが、全国统一しての反撃はできなかった。12月9日の全協の代表者会議でも問題提起はあったが、対応できない弱さが露呈した。長崎にとっても、そのころの東京は遠く、情報も遅かったし、具体的な闘いなど想定もできていなかった。

、郵政ユニオン（東京）

そして翌年の90年3月21日の春分の日、東京、千葉、神奈川の仲間が、郵政ユニオン（16名）＝首都圏だけの新労組を立上げる。このとき長崎は東京の動きに驚いた。幾人かの全協の人が、この独立労組に参加せずメンバーがそろっていなかった。長崎は「なぜ？」となった。

たしかに独立には二段式、三段式ロケットという時間差を認めていたし、

その確認があったにしても、それは A 地区と B 地区の全協間の時差であり、また支部三役などの機関を握っている場合の、組織選択時期だと私たちは思っていたからだ。東京の全協内の個々人に時間差があってもいいはずがないし、全協の総会で確認した「決めたことは守る」ということにも反している、長崎は東京の郵政全協へ強く迫った。

この郵政ユニオン東京の初代の土屋委員長は、以前の郵政全協の会議でも、「広島、長崎が出れば、義理（一人）でも出る」と発言しており、この立場から、東京、関東の郵政ユニオンのスタートだった。彼は義理固い。

長崎は首都圏の郵政全協の分解を実感し、その政治の難しさと、素早い動きについていけなかった。郵政全協と郵政ユニオンの対立と分岐。これは解決できない課題であり、いまも続いている。

だが、90年のこのときの組織問題は、一年後の東京の郵政ユニオン第2回大会のときには、全協からの仲間の加入が進み、これは無事、解消され、91年6月の郵政全労協結成時には、全労協で足並みがそろった。

、郵政広島労組（郵広労）

さらに、90年4月21日、郵政広島労組が広島東局や安芸府中局を中心に21名で立ちあがる。全通広島東の谷本大岳支部長らの執行部は、前年12月に執行権停止の処分を受けているなかの闘いであった。郵政全協最大の地域拠点、まさに砦としての広島の決起であったが、前述のように広島中郵の不参加で、厳しい発足となる。結成大会で組合員以外の出席は私一人であり、組織外の来賓もいない、まさに孤立無援のスタートであった。

郵広労結成のその日、私と谷本支部長が結成大会会場の広島東区民会館へ歩いて向かう途中、偶然にも広島駅前で広中支部の佐々木書記長と出会い、谷本支部長が「哲つあん！今からやるから」と声をかけた。私も、翌日の佐々木さんとの面会の約束をして、翌朝、佐々木書記長の自宅で数時間ほど話をしたが、対立は解けないままの別れとなる。その数年後、彼が倒れ、のちに亡くなったことを知らされる。

、郵政長崎労組（郵崎労）

そして90年5月27日に、郵政長崎労組（40人）が立ち上がる。いわゆる中郵クラス拠点の旗揚げで、郵政全協の組織戦は一応の目的を達成する。この結成会には全国の全協幹事会（伊達、谷本、高橋、棟棠さんら）が来崎され、また地元の大学教授や長船労組三役、また解雇争議団も祝賀に見えられた。これは当時の非公開での独立労組の結成会としては異例であった。しかし、実際には、その日、私たちの結成会場から500メートルも離れていない場所（バス停一つの間）で、全通地区が県下から200名を集めて「みなゆう会？」かの集会を開いており、ハラハラの結成大会だったのだが。ともあれ長崎は、労働界再編の「いざ全労協へ」の責任の一つを果たしたのだ。

、兵庫郵政連帯労組（兵庫連帯）

郵崎労結成の翌日、5月28日に、兵庫郵政連帯労組（8人）が立つ。長崎はこれを知らされていたと思うが、郵崎労の結成大会の翌日で、支援ができなかった。思えば初代委員長の中塚俊雄さん（姫路局）は、寡黙な人であっ

たが、独立派の背骨的存在で、会議でも筋を通し、頼れる人であった。また初代書記長の稲岡次郎さん（姫路局）は、90年2月の全通長中支部の臨時支部大会の際、広島東の谷本支部長と一緒に姫路から長崎に来られ、支部大会を傍聴され、ご支援をいただいた。全協の強い仲間意識と行動の鋭さに驚き、「稲岡恐るべし！」と、尊敬の念を抱いたものだった。長崎は一番苦しいときの友が真の友と感じ、支部の臨時支部大会では大変勇気をいただいた。

、89年から90年春までに、全労協をめざし独立労組を作ったのは、以上の6つの組合である。それ以前にできていた郵自労（大阪）と横浜中郵労組はここでは触れない。またその後、91年から数年間、相次いで旗揚げが続くが、これはあとで書かせてもらう。

九、なぜ独立労組だったのか

結果的に郵政の全労協の組合は、別々の独立労組となる。郵政全協の独立派にも、三つの流れ（それぞれのめざすもの）があった。

一つは、郵自労や郵政合同などの「民主、自立の労組論」である。

二つは、長崎などがいう「全労協志向」の労組。

三つは、東京を中心とした「4・28反処分闘争のため」という流れである。

この違いがずっと対立の元となり、その後にさまざまな問題をもたらす。一例が団交協約締結での基本方針の違い。また4・28反処分闘争の分岐や対応。さらには民主論での郵政合同の離脱。また2012年の郵産労との組織統合のときの離反も同様であった。また冷静に見るなら、これはなにも郵政に限ったことではなく、少数派組織の常でもあり、今でも団交権問題などで、周囲からの批判は根強い。

巻頭の「少数派労組の源流」にも書いたが、当時、左派の少数組合として、長崎三菱造船所の長船第三組合があった。多数が総評労組(全造船)を脱退し、同盟の労組(造船重機)を作り、残った左派が第一組合として少数派となった場合を除いて、普通に総評の労組から、自ら左の論理を掲げて組織を飛び出すという少数派労組のことである。私たちはこの長船労組と同じ長崎であり、彼らの影響を強く受け、独立労組へと道をとることができた。まさに師である。彼らも「郵崎労は長船の後継労組」と語っていた。長船労組は91年の全国一般・全国協の結成に大きな影響を与えた。長船は全労協の左派少数組合の祖でもある。

もう一つ、郵政の少数派労働運動の先駆者である全福岡郵政労働組合（全福郵労）の存在がある。私たちも独立労組の手ほどきを受け、お世話になった労組である。全福郵労関連で、郵政における団交協約について触れる。郵政の団交項目は3・6協定、2・4協定やサービス表の変更など5項目以外の団交権を認めない。もういま(2015年)、これは国でなく民間会社だから不当だという指摘もあるが、会社はいまだに譲らない。全福郵労が1989年11月に結んだ団交協約の付属了解事項の2の(3)に「上記以外の事項であっても、郵便局段階の場にふさわしいものについては、その場で取り扱うことができる」というのがあった。一般にいう労働条件に関する事項とされるが、全福郵労

はこの団交協約を別の事情で破棄し、その後私たちと同じ団交協約を結んだ。

全福郵労の路線は、全労協志向の労組ではなく、全通の非民主的な組織弾圧に反対する「自主的な民主労組」という立場であった。だから、全通が制裁を解けば、いつでも全通に戻るとしていた。

郵政全協はこの二つの独立労組の影響を強く受けた。郵政全協内には全通から独立するとしても、できる労組が全国単一の組織では、中央集権的な官僚的・民同的な労働組合(第二全通)となるとの考えが強く、全国単一組織体は取らないとする民主独立派が多かった。郵政全協の幹事会でも「長崎(郵崎労)は民同・全通だ」との指摘もあった。当時、これは当たっていたと思う。(民同とは、戦後労働運動で産別会議から「民主化同盟(民同)」をつくり、総評へ転換させた右派を総称する)

96年、郵政合同は民主労組論で郵政全労協から離れた。その後、私は棟棠さんらと仙台へ行き、郵政合同と組織復帰を幾度か話し合った。初めはダメだったが、何度目かの話し合いのとき、合同が「合同の大会決定後に郵政全労協へ再加入する」との約束をした。私の思いだが、そのころ郵政合同の組織問題は、長崎との路線対立の結果といわれていた。しかしこの仙台会議で、両者の関係は氷解したと思っている。的場書記長はそのとき私に、(組織復帰のために)「仙台まで来てくれてありがとう」と喜んだのだから。しかしその年、郵政全労協への再加入は組合大会で決まらず、的場さんが急逝したこともあり、組織復帰が実現せず、さらに会議に同席していた長谷川さんも亡くなれば、合同の復帰は遠くなっていく。民主派の別の思いがあるのだろう。

十、なぜ反連合・全労協への風はやんだのか

89年11月の連合発足ののち、反連合・全労協の風はなぜか急にやむ。いまこれをみるなら、右翼労戦統一反対とは、反連合=全労協への組織的結集と同じではなかったのだと思う。全国の反対派も組織分離での全労協参加ではなかった。総評三顧問で社会主義協会派のトップ・岩井章さんの提唱での全労協結集のはずなのに、国労以外の多くは全労協に動かなかった。長崎の左派とされた長崎の国労も、独立労組の郵崎労とは距離があった。

また、あれほど「反対」と言っていた樋口篤三さんたちも、連合発足後は、非独立・組織内反対派のように、私には感じられた。また長船も、郵崎労が地域全労協としての長崎全労協結成を呼びかけたが、これに参加せず、郵崎労と対立したまま、2013年12月に組合を解散されてしまった。

かくも全国政治は難しく、左派こそ不可解と常々感じている。70年代初期の少数派労働運動の起点となった全国労働組合活動家連絡会(全労活)が、労戦統一のなかに二つ(労働情報派と闘うセンター派)に分岐し、しかも、ともに独立少数組合の全労協参加路線はなく、その点では郵政全労協はとりわけ異質な存在でもあったのだが……。

素直に見れば、この再編に関し、私は前述したとおり、樋口さんが言った「連合は現代の産業報国会」と一度でも批判した人は、連合には絶対入らないだろうと考えていた。(単純すぎるが)。産業報国会とは、先の侵略戦争を大

政翼賛会の一員として支えた団体で、労組が国家主義的に取り込まれた典型である。戦後の労組(私たち)は、二度と歩んではならない道であると、肝に銘じたはずである。侵略戦争に加担した労組・労働者として、戦争責任の反省の中軸をなす、けじめの言葉で、これは軽々しく使うものではない。

また、岩井さんが言った「国労防衛」も、誰もが当然やるものと考えていた。しかし現実はそうではなかった。国鉄民営化に反対してきた全国の左派でも、全労協で国労とともに闘うのではなく、連帯する会への加入であった。いわば共闘ではなく支援の立場で免罪とされたのだ。意外な展開だった。

当時、官民統一の720万人の連合結成を、労働者総団結のナショナルセンターと評価する左派(労組と党派)は少なかった。参加すべきだという党派もいくつかあることは知っていたが・・・、多くは連合に反対であった。しかしいざ連合ができてしまうと、国労、全港湾ほかの大労組の多くがこれに参加し、組織戦は幕を閉じる。そしてそれまで叫ばれていた反連合・全労協への風は、なぜか急にやむ。左派の人たちも連合を批判はするが、反連合の立場で全労協の独立労組を作る路線は、91年12月の全国一般・全国協議会と郵政全労協の結成、そして一部の教組などでの独立労組を除けば非常に少なかった。

理由はさまざまだろうが、代表的なことを一つ上げれば、労働者が既存の組織を割り、分裂組合を作るということに、日本の左派労働者は「分裂主義」として抵抗感があった。統一と団結論は絶対不可侵の神話でもあった。だから当時の反連合は、結成前までの旗印、流行語ではあったが、組織独立路線ではなかったのだ。これは1600年、天下分け目の関ヶ原決戦のとき、勝ち組に乗ろうとする大名が続出したときに似ている。日本人の気質だろうが、当時の反連合派にもそれを感じた。

全労協か否かの組織戦が落ちつくと、私たちは独立労組批判の矢面に立つ。その一つが、「労働情報」(90年10月のNO350号)に載った記事である。編集委員の対談方式の言葉であったが、「郵政の分裂ミニ組合は分裂主義の典型だ」と書かれた。後ろから鉄砲の球が飛んできた。私は郵政全労協の幹事会で「労働情報との絶縁」を要求した。こちらの申し入れで、労働情報は「本意ではない」と回答し、それで本件は整理したが、一時は緊迫した。また多くの党派もその機関誌で、郵政全労協は「はみだし」とか「分裂主義」と批判した。情勢をまとめれば、伝送便には結成宣言が載ったが、それ以外で郵政全労協結成を褒めてくれた記事にはお目にかかっていない。

連合の基本は労使協調であり、自由主義社会の労働運動で、社会主義や階級的労働運動を排除する組織である。おりから、91年にソビエト社会主義が解体され自由主義ロシアが誕生し、また東西ドイツの統一により、東西冷戦の終わりが、これの追い風となる。強欲の新自由主義が動き始めていた。

十一、郵政労組全国交流会

1、全福郵労との出会い

全福郵労と私たち郵政全協は、この独立労組結成前後から交流が始まり、郵政労組交流会として数年間、共同での運動が続いた。全福郵労の前身、全通福岡中央支部（福岡中郵）は、組織の民主的運営を発端として、中央本部の指令27号で制裁を受ける（21名が除名処分）、この経過のなかに反発して、1970年2月18日に78人でできた第三組合の独立民主労組である。連合か否かという議論とは性格を異にする組合であった。

全福郵労は、私たちが独立労組の全国統合＝郵政全労協の結成を提案したとき、路線の違いを理由に、私たちと距離を置く。全通の反動化を反面教師とするあまり、独立民主労組という縛りから、そうなったのだろう。

2014年3月、結成から44年、全福郵労は解散した。現役の組合員もいたがJP労組へ戻ったと聞く。もともと全通の制裁から組織を離れ、民主的な労組をめざしたわけだから、指令が解かれれば全通へ「戻る」としていた彼らの方針であった。その後、指令27号裁判では全福郵労が勝訴するが、全通復帰はならなかった。だから全通が組織統合でなくなったのち、少数でも独立組合の旗を守ったり、郵政全労協との統合という方針が出なかったのだろう。

90年代から全福郵労とは組織論を幾度か交わしたが、全国単一組織建設と民主的な労組論とは、交わることがなかった。解散時も長崎の郵政ユニオンが福岡へ二度ほど行き、組織協議をお願いしたが、そのまま終わった。素晴らしい組合であっただけに、解散は実に残念な結末であった。今も結成記念日の2月18日前後には、OBがたくさん集まって、集会や慰労会を開かれていると聞く。その力と影響力はいまも現場にあると思うから、なおさらだ。

少数組合が第一世代から二代目へと続き、組織が存在し続けるためには、全国性と継続性が重要だと思う。地域だけの独立民主労組では、当然、全国一本化をとらないし、その分、全国との関係性も薄くなり、やがて一代限りとなりやすいこともある。これも少数派の組織論の負の教訓だろう。

2、九州内の左派全通

全通九州の思い出である。2005年8月、ピースサイクルで鹿児島を走っていて台風となり、一日、日程にすきまが出て、全通・鹿児島に交流をお願いした。長崎の郵政ユニオンが全通時代から、鹿児島東支部の書記長・牟田実さんの分限免職撤回闘争を支援していた関係で、全通・鹿児島のトップ5～6人が応対してくれ、楽しい酒を飲んだ。そのとき、鹿児島は、90年に私たちが全通を離れたことを指して、「あのとき長崎が全通に残っていれば、九州地本内の反対派ももう少し頑張れたのに」と言われた。長崎の私たちにそれほど力ではなかったと思うが、この鹿児島の言葉には、実感がこもっていた。

牟田さんの分限免職取り消し裁判は、全国の反合研や人権を守る会が総力で闘ったが、2006年10月13日に福岡高裁宮崎支部で、牟田さん側が控訴を取り下げ、裁判が終わった。和解を郵政が拒否し、高裁が示した「牟田さんの行為は組合活動の範ちゅう。また分限となるほどの不適格性はなかった」という文言を、名誉回復だと判断して闘争は終わった。このころ、秋田・大曲局の須藤伸さんが高裁で勝利し、桜沢敏夫さんが人事院で勝利し、4・28

も高裁で逆転勝利していただけない、内部の組織事情もあったと思うが、意外であった。

また、80年代、全通・熊本にも伝送便読者がいる職場拠点があった。しかしそのリーダーが運動のために退職することとなった。私は熊本の彼の自宅を訪ね、退職を思いとどまるように説得したがかなわず、その後、自然と離れていった。全福郵労と郵崎労、そして全通鹿児島と熊本。それぞれに違いがあり、反対派の運動と組織がまとまらなかった。これは反省だ。

3、郵政労組全国交流会

当時、郵政全協のほかに、90年3月11日に結成された郵政労組全国交流会が存在した。全福郵労が中心でまとめた全国組織である。この呼びかけに応え、独立労組を先行した大阪の郵自労や仙台の郵政合同らが参加し、幹事組合として作った組織だ。私たち長崎の郵崎労もあとからこれに参加する。

この組織は、全国持ち回りでスポーツ交流、討論や学習会を行っていた。90年の年末闘争のとき、統一要求と共同闘争をやることが代表者会議で決定されたが、後日、全福郵労は組合機関の同意が得られなかったとして、この共同闘争から降りてしまう。会議には全福のトップが参加されての決定だっただけに、組合観の違いを感じた。結局、91年の全労協系の独立労組の全国一本化（郵政全労協）という組織発足に伴い、これと距離をおく立場から、次第に双方が離れ、その後、全国労組交流会も消滅をする。

十二、郵政全労協の結成前夜

1、全国統一の動き

全協の独立労組から全国協議会(郵政全労協)への転換も難しかった。

一つは、せっかく独立民主労組を作ったのに、また全国単一組織へ逆戻りか、という思いが、それぞれの組合に強くあったことだ。

二つは、当時、郵政の少数派運動のリーダー的存在の全福郵労との関係もあった。郵政労組全国交流会をどうするのか、というものである。これは関係労組（長崎と仙台）が直接、それぞれ福岡に話をすることで整理した。後日、話し合いがもたれたが全福郵労は郵政全労協には不参加となる。

これでも思い出がある。91年2月に京都で開かれた郵政労組全国交流会で、広島谷本さんが、「俺たちは勝ちに行くために、郵政全労協で全国をめざす。福岡は単独労組で、地域にとどまるのか」と、全福郵労に全国組織への参加を迫ったが、結論は出なかった。

2、三度の結成準備会

、90年10月5日の郵政全協の独立労組会議

大阪の丸信旅館で郵政全協の労組代表者会議が開かれた。場所の旅館というひなびた名称からして、いかにも秘密会議という感じだが、郵政全協

系の独立労組の今後を決める重要な会議であった。全国では翌日（10/6）に京都で、郵政労組全国交流会がもたれる。そのなかで全国組織を協議することができるかどうか。その方向性を決める大切な会議だったのである。

会議は難航したがなんとかまとまり、これが全国協議会の郵政全労協への第一歩となる。大阪の地理に詳しくないので、この旅館がいまはどこかわからないが、天満近くの繁華街であったような気がする。なにやら幕末の池田屋会議の感じもするが、大事な会議だった・・・。

参加組合と参加者は、仙台・郵政合同（的場）、郵政多摩労組（棟棠）、郵政ユニオン・東京（横山）、大阪・郵自労（高橋）、兵庫・郵政連帯（中塚、稲岡）、広島・郵広労（谷本）、長崎・郵崎労（中島）が集まった。

議題は、独立労組の今後であった。結果は、協議会としての郵政全労協の結成がほぼ決まり、発足準備会を翌91年2月4日に開くことが決まった。

、全国統一へ、郵自労にオルグ

郵政全労協の発足準備会は決まったが、組織が一本にまとまるかどうかは、大阪郵政自立共生労組（郵自労）の参加いかんにあった。もともと全労協をめざして作られた組合ではなく、単独民主労組の典型であり、彼らから見て、郵政全労協という全国協議会こそ、ミニ全通となるからだ。また、郵自労結成時にお世話になった全福郵労との関係もあったらしい。また郵自労のトップも郵政全協ではなかったと聞く。

91年2月3日、私と谷本さんと上原正光さん（神奈川・中原局）の3人で郵自労の事務所を訪ねた。郵政全労協結成準備会への参加要請のオルグだったが、厳しい会議だった。結果はなんとかご無理を願えた。なにせ、その翌日が郵政全労協結成準備会の当日だったからだ。失敗は全国協議会路線の破産なのだ。そのときの決め言葉は、かつて伊達さんと吉野さんが中執選挙で長崎に来て言われたあの言葉、「長崎なしの中執選では全協もない」という殺し文句の無断借用で、「郵自労なしに郵政全労協はない」と迫り、ついに郵自労のみなさんが決断してくれた。まさにギリギリだった。このオルグに失敗していれば、今の大阪の郵政ユニオンの現状もないだろう。それにしても、郵自労の方々、ヒリヒリするほど鋭い人が多かった。全通の全国大会演壇に駆け上がり、抗議するほどの人だったからだが・・・。

、91年2月4日、郵政全労協結成準備会発足

東京・浜松町の海員会館で、八組合が参加して郵政全労協の第1回目の発足準備会が開かれた。参加組合と参加者は、ほぼ前回と同じだが、仙台・郵政合同（的場）、郵政多摩労組（棟棠）、郵政ユニオン・東京（横山、上原、斉藤）、大阪・郵自労（高橋）、兵庫・郵政連帯（中塚）、広島・郵広労（谷本）、長崎・郵崎労（中島）であった。

決まったのは、正式名称を全労協・郵政労働組合・全国協議会（略称・郵政全労協）として、6月9日に京都で結成総会を開くことであった。

、91年3月20日、第2回、郵政全労協結成準備会

第2回準備会が、東京の浜松町の海員会館で開かれた。メンバーはまた前回とほぼ同じで、仙台・郵政合同（的場）、郵政多摩労組（棟棠）、郵政ユニ

オン・東京（横山、上原、土屋委員長、斉藤）、大阪・郵自労（高橋、鈴木）、兵庫・郵政連帯（稲岡）、広島・郵広労（谷本）、長崎・郵崎労（中島）だが、新たに横浜中郵労組の佐藤修作委員長の参加があった。

発足後の三役体制や事務局の話し合いが行われ、トップを議長とすること、事務局を東京に持ってもらうなどが決まったが、誰にお願いするかは決まらず、次回まで先送りとなった。理由は、議長就任を要請された中島が「家族の同意がない」という事情で辞退したからだった。

、91年5月17～18日、第3回、郵政全労協結成準備会

第3回結成準備会が京都の部落解放会館で開かれた。あいまいな記憶だが京都の祭が近くで開かれていて、行列を見物した思いがある。メンバーはほぼ前回と同じで、今回から京都・全協の多田義則さん（京都・左京局）が参加されている。いよいよ、6月9日の結成総会が本決まりとなり、結成総会の現地・事務局を京都の多田さんのお宅と決めさせてもらった。

この会議の意味は、初めてそれぞれの独立労組の組織実態と、組合員数と、結成総会参加人数が報告されたことである。以下、発言組合ごとに、

- 1) 長崎(郵崎労)「組合員は52名となった。結成総会は40名が参加する。郵崎労の旗も郵崎労歌も作った。全労協には昨年7月に入った。」
- 2) 広島・郵広労、「組合員は25名だ。当日の参加は10名を目指している。地域の全労協に参加した。」
- 3) 兵庫・連帯、「組合員数は8名だ。結成総会には4名が参加する。」
- 4) 大阪・郵自労、「組合員数は18名だ。結成総会には全員が参加する。全労協にはすでに参加している。」
- 5) 横浜中郵労組、「組合員は3名だ。6月9日には2名が参加する。」
- 6) 郵政ユニオン、「組合員は16名だ。総会には全員参加を目指している。東京全労協へ組織参加をした。神奈川全労協は1000名でスタートする。」
- 7) 郵多労、「組合員は13名だ。4局に組合員がいる。総会へは10人ほどが参加する。川口の遊生ユニオンの全労協参加は遠い。」
- 8) 郵政合同、「組合員は30名だ。6月9日は12名が参加する。」組織化で、山形は重く、秋田は全通に残る。」
- 9) 京都・全協、「郵政全労協の結成総会に、京都の組合結成が間に合わないが、そのあとで参加する。」
- 10) 大阪豊中は、ゼネラルユニオンで2名がすでに全労協に参加している。などであったが、以上を整理すると、91年5月現在、独立労組8組合が郵政全労協に参加し、後日、京都が参加予定であることが決まった。組合員数は京都を入れて約180名少しとなった。また結成総会の当日参加も100名前後となることが確認された。

3、91年6月8日、結成総会の前日

結成総会の前日、最後の第4回結成準備会が京都で開かれた。人事、議案書、その他が確認され、初代議長に郵政合同の長谷川譲さんが就くこととな

り、組合の旗も腕章も決まった。

そこで話題は、総会から外れるが、準備会では組合歌や組合バッジの取り扱いが問題となった。組合バッジはすでに広島郵広労が作成していたものを全国へ配り、長崎なども「郵崎労バッジ」として使っていたし、勤務中も組合の権利として、全員が制服につけて仕事をしていた。

また、組合歌の扱いも議論となった。組合歌は郵崎労が自主的に組合員への公募で作成していて、結成総会で「歌う」ことは決まったが、郵政全労協の歌とはしないとなった。バッジや、組合歌は、まさに「ミニ全通」の官僚制の象徴に映ったのだろう。これらはその組合の自主的な取り扱いでということ、全国化しなかった。総会の諸準備は現地、京都の郵政全協の方々や、大阪の郵自労の仲間をお願いした。なおこの組合歌は郵政ユニオン長崎のHPで聴くことができる。参考までに。

十三、郵政全労協の結成

1、全労協・郵政労組全国協議会の結成総会

91年6月9日。いよいよ郵政全労協結成総会の当日となる。

京都市の部落解放会館に集まった労働者は8労組、101名であった。全労協の中央本部からは佐藤事務局次長、大阪全労協からは電通合同の前田裕晤さんや大阪・国労、教育合同などの仲間から祝福していただいた。

結成総会での大会議長は郵崎労の井川さんと郵自労の広田さんに勤めていただいた。議事の提案ほか、質疑応答も結成準備委員で郵政合同の的場書記長が仕切ってくれた。それぞれはいまも写真が残る思い出のシーンだ。

(、結成総会の写真は本紙の表紙にプリントされている)。

このときの郵政全労協の実態は8組合、総数が当日確認で185名であり、労組数と組合員数は当初の予測をはるかに下回っていた。これが全国から「ミニ組合」と称された原因であるが、当時も「あの権利の全通から抜けるなんて」という批判もあり、郵政と言えば「全通」と必ず言われるほどの、苦しい歩みが始まる。ともあれ、労組は大義よりも、まず「数」である。91,6,9全国組織発足の実感はこれであり、これも大事な教訓である。

2、参加組合名と組織数、および組合三役

- 、郵政合同(東北、仙台、長谷川委員長、的場書記長、33名)
- 、郵政ユニオン(東京、関東、土屋委員長、斉藤書記長、18名)
- 、郵政多摩合同労組(東京・多摩、中村委員長、棟堂書記長、15人)
- 、横浜中郵労組(横浜、佐藤委員長、3名)
- 、郵政大阪自立共生労組(大阪城東、井筒委員長、高橋書記長、20名)
- 、兵庫郵政連帯労組(姫路、中塚委員長、稲岡書記長、8名)
- 、郵政広島労組(広島東、谷本委員長、西田書記長、25名)
- 、郵政長崎労組(長崎、中島委員長、末續書記長、52名)
- 、京都郵政労組はオブ参加。(91年10月結成予定)

(組合員数はそれぞれに概数もある)

3、第1期(1991年度)の執行部(幹事会)

役職	氏名	職場	組合名
議長	長谷川 譲	仙台中郵	郵政合同
副議長	中塚俊雄	兵庫、姫路	兵庫連帯
〃	中島義雄	長崎中郵	郵崎労
事務局長	斎藤明男	東京、石神井	郵政ユニオン
幹事	谷本大岳	広島東	郵広労
〃	佐藤修作	横浜中郵	横中郵労
〃	高橋伸二	大阪、城東	郵自労
〃	棗 浄	東京、五日市	郵多労
〃	吉野信次	東京、南部小包	郵政ユニオン
〃	横山喜一	東京貯金	郵政ユニオン
〃	的場良生	宮城、仙台南	郵政合同
会計監査	中村裕一	広島東	郵広労
〃	山本恭郎	長崎中郵	郵崎労

結成総会には長崎からも、当時まだあった JR の寝台特急「あかつき」で一昼夜かけて 40 名が参加した。動機は京都観光気分だったが、歴史的な郵政全労協の結成総会を主体的に担うという気概をみんなもっていたし、総会後の祝賀会では、自分たちで作った「郵崎労歌」を全員で披露した。

こういうところが、民同といわれる長崎の全通体質なのだが、なかなか治らなかった。ただ、祝賀会の祝辞で、大阪全労協の前田さんが「組合では負けないが、この組合歌には負けたね」と、笑いであいさつされたことは記憶している。ちなみに、郵政全労協の機関紙の創刊号には、郵崎労が歌をみんなで合唱している写真が大きく掲載され、「レセプションを大いに盛り上げた」と紹介された。(自画自賛すぎるが・・・)。

4、結成宣言、総会スローガン

結成総会の議案書は長くて載せられないが、郵政全労協のめざすものとして、結成宣言と総会のスローガンを並べてみたい。大阪が作ってくれた大きいもので、堂々とした垂れ幕であった。

1) 結成宣言

本日ここに私たちは全国 8 つの組合で、郵政全労協を結成しました。私たちの反連合・郵政全労協の結成で、郵政に全労協の旗が立ちました。その力と数は少なく、微力ですが、めざすものは大きく、素晴らしい未来を展望し、明るく闘います。・・・とある。私が原案を書いて、幹事会で協議したものだが、いま読むと、少し文に緩さを感じる。政治的には 4 つの現実認識と視点で八つの目標を掲げてのスタートであった。

スローガンは、

- 、郵政事業活性化計画の撤回。郵政合理化と対決しよう。
 - 、4・28 反マル生処分撤回、裁判闘争を継続して闘おう。
 - 、国労連帯、1047 名の首切り撤回。地域の仲間と共に闘おう。
 - 、反戦・反核・反原発、国際連帯。91 ピースサイクルを成功させよう。
- 以上が結成総会の報告である。

これが郵政全労協の発足までの歴史であり、長崎から見た流れである。そしてこの協議会組織は、2004 年の郵政労働者ユニオン = 全国単一組織として組織再編が行われた。そののち、2012 年に全労連の郵政産業労働組合（郵産労）と合併を行い、郵政産業労働者ユニオンとして再スタートを切る。

十四、その後の労組結成の流れ

、京都郵政労組(京郵労)の結成と近畿の状況

92 年 10 月 18 日に京都郵政労組（京郵労）ができる。すでに郵政全労協の結成時には、オブで結成総会に出ており、結成地元の事務局も多田さんを中心にお世話いただくなど、郵政全労協そのものであった。郵政全労協の本部からは斎藤事務局長が参加し、祝辞を述べているが、私は所要でこの結成大会に出ていない。郵政全労協結成以降の独立労組の大会に出なかったのはこのときが初めてで、京都には申し訳なかった。その後、近畿圏では京都、兵庫、大阪の二つと、四つの組合がたつことになり、これが全国を引っ張り始め、その後この四労組は組織統合し、郵政近畿労働組合（郵近労）となる。

、広島中郵労組（広中労）の結成

郵政全労協結成の 2 年後、93 年 3 月 20 日には広島中郵で広中労が 50 人で立つ。特大中郵での郵政全労協結成である。郵政全労協の夢がかなう瞬間だった。郵政全労協が一番心待ちにした広中労の結成であり、喜びもまたひとしおであった。その後、組合から真っ赤な色の広中労結成記念の NTT のテレホンカードをいただいた。いまでも大切に持っている。

ここは厳しい組織戦だった。長崎も日替わりで人を広島へ派遣し、ともに闘った。結成大会は広島市でも大きい県民文化センター（鯉城会館）で開き、新組合がスタートした。全通も地区や支部を動員して会場まで押し掛けてきた。しかし、郵広労と郵崎労などの郵政全労協が前面に立ち、これをはねかえし、大会は成功した。

ところで、結成大会前日、広島中郵近くのアパートの一室におかれた新労組の事務所での出来事が記憶にある。広中労結成の最後の打ち合わせがあっ
ていて、10 数人がいた。そこで全通の書記局になにか忘れた(鍵の返却?)と
かで、対応が迫られた。みんな脱退届を出した後である。そのとき、メン
バーでは若手であった上関英穂さんが、「わしが行く」と広島弁で言うのだが、
私は、明日、新労組結成という緊迫感のなかで、この人はなんてひょうひょ
うとしながら、一番辛い仕事に手を挙げるのかと感心した。その彼はいま郵
政ユニオン本部中執で、重責を担っている。責任感のある人だ。

その広中支部で、結成から 22 年の今年、ようやく組合事務所が取れたと 10 月の初めに情報がきた。差別的な不貸与は会社の差別的な嫌がらせだが、中国地本 200 名。広島東と安芸府中の郵広労の 21 人が決起して今日がある。組合員数を 10 倍に増やしたその力は素晴らしい。

郵崎労はこの広中労の結成の前一週間ほどに、長崎から延べ 10 数人が支援にかけつけた。理由は郵政全労協最大の組織戦となると判断したからだ。もう一つは、84 年に「出るときは一緒」と広中の先行に「待った」をかけて、ご迷惑をかけたことへの罪滅ぼしのつもりだった。支援といっても事務所番程度だったが、「広島と長崎は兄弟」。その思いからだった。無論、兄貴は広島である。

、郵政大阪労働組合(郵大労)の結成

大阪の豊中や吹田へも谷本さんらと数回オルグに行った。そして、広中労結成から二か月後の 5 月 5 日、天満の国労会館で結成大会を開いた。57 名の組合員での発足は、郵政全労協最大の数である。この結成には郵政全労協の仲間が多数かけつけた。

この組合の特徴は、みんな若いということだった。初代委員長に松岡幹夫さん(豊中局)がついた。役員選挙で選管が立候補者の氏名と年齢を報告するとき、松岡さんを 39 歳か 40 歳と言ったら、みんなどっと沸いた。20 歳代が多数派で、彼が一番年上だったのだろうか。

その松岡さんも 2012 年の郵政ユニオンの統一時の中央本部書記長として活躍され、統一後も本部副委員長として活躍をつづけられた。また、ここからは家門和宏さんがいま本部中執として出ている。ピースサイクル発祥の拠点職場の独立に、全国は勢いづいた。

、首都圏 3 労組が統一

93 年 5 月 24 日、首都圏の 3 労組(郵政ユニオン、郵多労、横中労)の組織統一が行われている。このころは、各地に別々に郵政全労協独立労組を結成しているのは、一般に見えにくいとの指摘から、組織統一論が急速に高まり、広島、近畿などで議論が進む。一方で、郵政合同は郵政全労協の中央集権の体質を批判し、中央委員会の開催にも異議を唱えていた。また長崎は、それなら郵崎労を解散して、東京のユニオンに加入するという大会決議を行い、全国の統一を求めたりしていた。

93 年の 6 月の大会で長谷川議長が退任し、中島が 2 代目の議長に就くが、郵政合同には「組織離脱がないように」と要請を行い、郵政合同も「ない」としていたが、後の離脱の萌芽がこのときすでに出ているのだろう。

、千葉郵政労働組合(千郵労)結成

93 年 9 月に郵政全労協が千葉中郵の仲間にオルグに行く。千葉の船橋の土屋さんの紹介だったと思うが、千葉中郵とは私はそれまで面識がなく、初対面だったが、椿茂雄さんたちと親しく話ができて、今後に期待した。郵政全労協は首都圏の 4 人と私の 5 人だった。話のなかで聞くと、近々組合から処分が出るということで、組織づくりを急ごうとなった。そして 94 年 12 月 13

日に千葉中郵で郵政全労協の旗が立ち、千葉郵政労組ができた。新しいメンバーへの組織の広がり、全国を勇気づけた。

、岡山の今田さんが支部を作る

郵政全協や伝送便の重要な拠点で、岡山県北に全逓備中北支部があった。ほぼ執行部を握っていて、強力だった。84年の広島中郵の執行権停止対応策の広島会議にもメンバーが参加し、広中・全協の全逓から脱退・独立を止めた同じ仲間だった。しかし、89年の組織戦で岡山は、独立労組結成には加わらず、全逓にとどまる。その後、このメンバーの今田源治さんが、郵政全労協の組合を「一人でも作る」と決意されて、岡山北支部を作られた。「全国の仲間との約束だ」といわれたが、一人での決起は辛かったと思う。そののち、病気や配転もあって、苦労をなされた。(後日記。この連載が始まったのちの12月23日に今田源治さんの突然の訃報が届いた。彼が岡山北で「郵政ユニオンの支部を作りたい」といわれたとき、岡山でお会いし、瀬戸大橋にご案内いただいて、途中の小さい島に降りて食事をし、組織作りの苦労話をされた記憶が思い出される。あらためてご冥福をお祈りする)

、郵政ユニオン東海地本

後続の労組では東海地本の浜松の記憶が強い。全逓時代に伝送便編集委員会で、いつも黙って隅に座っていた浜松の森下茂さん(浜松局)の思い出である。多分一番の若手だったと思うが、全逓離脱が迫った89年の秋ころ、彼から私に電話があった。全逓長中支部の「反連合」の定期大会議案書を「ほしい」というのであった。彼の気持ちが全労協に向かっていると感じた。

郵政全労協は浜松へ何回か組織化のオルグに行った。メンバーは高橋、谷本、上原、棟棠さんらと中島で、だいたい決まったオルグ団だった。しかし、話してみると内部が独立派にまとまっていなかった。理由は、東海の指導部で、この9月に亡くなられた初代委員長の池田さんが、自分の民事裁判のからみで、独立にちゅうちょをされていたからだ。裁判を支援している外部の方への配慮だった。私は「全国か、自分の裁判か」と池田さんに迫ったが、結論は出なかった。そのもつれた糸を森下さんらが整理してくれて、スタートにこぎつけたことは、やはり「全協の約束」を守った彼の身上だったのだろう。結成大会は98年10月4日に浜松で開かれ、私も出た。

この東海からは鈴木英夫さんが郵政ユニオンの中執に出られ、実務的にもまた地域的にも、全国に影響を与えられた。今年が定年となり、全労協・静岡県共闘からの全労協の全国幹事として、活躍を続けられている。

、沖縄支部結成

沖縄ピースサイクルで何度も顔を合わせていた比嘉宏さん(那覇東局)へ、長崎が組織加入の要請に行った。1998年2月であった。長崎からは組織担当の鈴木功さんと小島滋さんが出かけ、前向きの返事をいただいた。そして比嘉さんが郵政ユニオンへの参加を決意されて、98年6月26日、支部結成大会を那覇市で開いた。沖縄でのたった一人の決断で、大変ご苦労をかけたが、厳しい環境だったと思う。ただ特別だったのは、この郵政ユニオンの組合作りで、地方の支部の結成大会に全労協本部のトップが行くことはなかったが、

この沖縄へは全労協本部の子島書記長が出席された。全労協の沖縄へかけた思いがあったと思うが、長崎も 10 人ほどが沖縄へ行った。2 年ほど前に会社を退職されたが、いまも郵政ユニオンのシルバーとして、また一坪反戦地主会の事務局長として闘っておられる。

、広島・呉支部が立つ

呉支部は、いま旧郵政ユニオンの単独局では最大数の支部である。その結成大会(40 人)は、98 年 4 月 4 日に呉で開かれた。初代支部長は服部浩さんだった。結成大会では伝送便の主筆であり、当時の郵政全協の議長である米今達也さんと久しぶりに再会した。呉は全協内でも米今議長を抱えていることから全通派だとされていた。しかし、広中労や郵広労の仲間の説得が功を奏し、結成にこぎつけたことは評価が高い。昨年だったか、米今さんの定年のお祝い会で呉へ出かけたが、体調を悪くされていた。継続雇用もするが、体力が・・・と言っておられた。今はだいぶいいと聞いているが。

郵政全労協はこの呉の結成大会と合わせ、広島で第 1 回の青年会議を開く。青年部だ。長崎も 10 名ほどが出た。メモによると現在の長崎を支える向井副支部長、山田書記長、海江田弘子執行委員などの名前が見える。

、岡山支部の結成

2010 年 4 月 25 日。郵政ユニオン岡山支部が中郵を中心に立つ。もともと岡山市では岡山中郵、貯金事務センターなどが、伝送便の拠点支部であった。組織建設が待たれたが、広島の熱心な説得によって、ようやく支部ができた。

支部の結成大会に参加した私は、「忘れ物を取りにきた」とあいさつをした。「全協としてともに立つ」という盟約を実行した岡山中郵の仲間たちへのお礼の言葉であった。伝送便として交流があった時代からするなら、ずいぶん時間が経っており、知らない人ばかりであったが、郵政ユニオン中国地本の強力な一員として、今後の健闘を期待したい。

岡山市は地区労運動が残っていて、支部の事務所も地区労会館に間借りしている。また初代支部長の小倉博司さん(岡山中郵)が地区労の議長をしておられる。その関係で、小倉さんが今年の地区労交流会・長崎へ参加された。会議の後、夜の歓楽街・思案橋へくり出し、長崎の友人たちや、同会へ参加していた JAL 原告団や地元の中川弁護士らと親しく懇親を重ねた。

、香川支部の結成

2004 年 2 月 1 日に 5 名で四国・高松の香川支部が立った。須藤行彦さんが中心で、郵政ユニオンとしては四国で二番目の支部であった。私は二週間後の結成祝賀会には出ているが、結成大会には出席していない。

結成は広島のおかげだが、大会には多彩な顔ぶれが参加されている。香川のおかげで、全国組織としての体制が整った感じで、4 か月後の 6 月、全国単一の郵政労働者ユニオンの旗揚げへと流れができてくる。

、そのほかで、

首都圏での拠点支部が立つ。97 年 4 月 27 日の同じ日に、小石川支部(15 名)が立ち、蒲田支部(11 人)が立っている。また神奈川の反合研の人たち

との話し合いも、箱根や熱海などで別の集まりが開かれた機会を利用し、幾度か行い、上原さんのオルグもあって、郵政ユニオンへ参加された。この支部出身の山城保男さんは横須賀市の市議会議員を現在やっておられる。(後日記。その彼も15年11月に突然の訃報が届く。60歳半ばであるだけに悔やまれてならない、合掌)

そのほか結成の年月は省くが、その後、郵政全協以外の仲間たちも参加が始まる。福岡、福島、北海道、新潟、そしてそのほかにも全国各地の仲間が加わり、郵政ユニオンが次第に大きくなっていく。これこそ、郵政全協が第7回総会で決めた「新労組合流」という約束を一途に守ってくれたからだ。

郵政全労協の独立労組結成の歴史は、あまり労働運動の歴史本には載っていない。ただ、「少数派労働運動の軌跡」(柘植書房)には、郵政全労協の発足と広中労、郵大労結成が載っている。もちろん89年の労働界再編時の郵崎労結成も郵政合同結成も名前は無い。注目されていない証拠だが、93年のこのころは少し郵政全労協も注目度が出たのだろうか。

十五、郵政全労協の具体的な闘い

1、全労協の原点、国鉄闘争

全労協がめざしたものは総評路線の継承発展であり、階級的に闘う労働運動であった。当然、郵政全労協も同じであった。

その一つは、国鉄分割民営化反対闘争であった。国家的不当労働行為で10万人の人員整理、1047名を解雇し、国労を解体し、総評や社会党をつぶすという国(中曽根首相)の総攻撃(レッドパーシ)との闘いであった。まさに日本の戦後労働運動にとっても総力戦であった。この闘いの勝利なしには、日本の闘う労働運動の復権はないといわれていた。国労防衛、解雇撤回は全く正しい路線であり、そのために全労協が立ったのだ。これが全労協の原点であり、まさに一丁目一番地である。

しかし、全労協結成の合言葉であるこの闘いは困難を極めた。国労はJR不採用裁判に敗北し、2000年、「旧4党合意」で国鉄分割民営化を認めて、闘いの解決を図ろうとした。全労協も闘争団も混乱した。全労協大会では国労が一時退場する騒ぎもあった。

2000年3月、国労の旧4党合意での闘争終結に異を唱え、被解雇者300名の闘う闘争団が立つ。彼らは国労裁判敗訴を乗り越え、自らの裁判=鉄建公団訴訟判決で、2005年9月15日、国鉄の不当労働行為を認定させ、慰謝料500万円をふくめ、1000万円近くの慰謝料をかちとる。国鉄闘争での解雇者の名誉回復。これはこの闘いの最大の成果であり、この闘いの裁判過程で、唯一国家的犯罪を断罪した勝利であった。

解雇者たちはこの不当労働行為認定をテコに、国の責任を追及し、解決を迫る。国労や国鉄共闘会議、解雇者などは、統一体の4者・4団体をつくり交渉を強める。そして裁判所の勧めで国と和解し、原告一人当たり2300万円の解決金を勝ちとることができた。国鉄闘争の反転勝利のキは、この鉄建公団訴訟の不当労働行為認定の9・15難波判決にある。この国鉄闘争の解決

にあたり、民主党の政権交代のおかげだとか、さまざまな主張がある。しかし、民主党などの4党の役割は否定しないが、この新4党合意と国側の譲歩は、難波判決=国家的不当労働行為なしには得られなかったことは明白である。

私たちは、戦後最大の労働者攻撃（レッドパージ）の国鉄闘争を正面から受け止め、これを闘わない連合・全通を離れ、全労協の独立組合を作り、必死に闘うことで前に進んできた。これだけでも、全労協に入った価値があったと思う。また長崎はこの国鉄闘争の後半は、国鉄共闘会議として闘った。

被解雇者の闘いの23年間は確かに長かったが、自らだけの利益（保身）のために、妥協をしなかった人の思いを受け継ぐことはできた。闘う労組を解体するために国がレッドパージという指名解雇攻撃をかけたときに、それぞれがどうしたかは、いずれ歴史が明らかにするだろう。結果的に国労は少数派に転落し、労働運動論的に「戦術の間違い」と批判する人もあるが、かりに、多数派の国労がレッドパージ回避と称して、いち早く平和協定を結んだとしたら、本当に10万人の人員整理はなかっただろうか。その場合は逃げ遅れた別の人、別の労組へ攻撃がかかっただけであると思うからだ。闘った人が悪いわけではない。働く人の思想を選別し7600名を清算事業団に押し込み、1047名を解雇した国鉄。そこが最大の悪なのである。

なお、闘いの総括の詳細は、以下の本を紹介する。

- 、What Was 国鉄闘争 そして次へ。「ぶなの木出版、刊行委員会」
文中に、郵政労働者ユニオンと郵産労の組織統一の評価も書かれている。貴重な評価である。ぜひ読んでいただきたい。
 - 、国鉄闘争の真実 「スペース伽耶 二瓶久勝（国鉄共闘会議議長）」
 - 、国鉄闘争の成果と教訓「スペース伽耶 国鉄闘争を継承する会」。
- 私は長崎の国鉄共闘会議の議長をしていた関係で、この本の対談に出ている。一読願えればと念じる。

2、4・28反マル生処分撤回闘争

二つは79年4月28日、国と郵政による全通解体のためにつけられた4・28不当処分との闘いである。処分以来、被解雇者らは28年間も闘いぬいた。4・28は最後まで裁判を闘った原告7名全員の不当な免職を取り消すという大勝利を勝ちとった。16万人の全通が途中で闘いを放棄し、被免職者を組織から除名した闘いに、原告と「4・28をともに闘うネットワーク」とほかの団体とともに、郵政ユニオンは勝てたのだ。原告の苦しみは想像を超えるが、素晴らしい闘いであった。解雇時の平均年齢が27歳であったから、終結時にはみんな60歳前後だった。

郵政全労協の4・28といえば原告の名古屋哲一さん（八王子郵便局）である。彼は91年6月9日の郵政全労協の結成総会に出席されている。その後、この独立労組に加入し、いつも仲間であった。同じく郵政全協の池田実さんは伝送便の編集長であった。この両名はずっと郵崎労の機関誌「未来」に、月に一度、闘いの報告として寄稿をしてくれた。これは2007年の闘争終結まで続いた。長崎もこの闘いの一翼を担えたと感じている。

90年、全逓がこの反処分闘争で「裁判取り下げ・再受験」を提案した。91年2月24日に受験をした全員が3月21日に不合格となる。そして全逓は91年4月22日の第99回中央委員会で、この闘争の終結を決めた。

91年3月、4・28の闘争組織(4・28連絡会)は再受験をめくり、紛糾する。受験を拒否した6名と、受験した1人の裁判復帰を巡り、対立が激化した。わたしたちは名古屋、池田さんらを抱えて、ともに闘うネットワークを立ち上げる。このときが4・28反処分闘争の闘いのなかで一番苦しいときであった。当時のビラなどを見ると、東京は大変だった。このときも棟棠さんや横山さんや奥山さんらが事務局をしっかりと動かし、それ以降の闘いの勝利へと道をつけたことは、特記すべきことである。闘争勝利後に、郵政全協や伝送便、4・28をともに闘うネットや郵政ユニオンの第二事務所などの共同事務所となっている秋葉原のビルは、池田さんのおかげである。ここはいまも活動家の拠点となり、関係が続いている。

なお付言するが、この闘いの「総括」は重要だが、ここでは改めては書かない。私自身、2007年4月に出た「伝送便」の4・28反処分闘争勝利特集号や、それまでの伝送便などに、幾度も書いている。また、この勝利のときの長崎報告集会で出した、いくつかの総括文書にもまとめてある。これらは郵政ユニオン長崎のHPに掲載しているので、参照されたい。

日本の戦後労働運動の分岐のとき、体を張ってその最先頭で闘い、国から弾圧されて28年を闘い、これに勝利した意味は、その名前の通り、日本の戦後労働運動の歴史に刻まれる闘いであった。原告団に重ねて、ごくろうさまの言葉を贈りたい。

十六、全労協全国大会「雑感」

1、郵政全労協が初の全労協全国幹事を出す

93年7月1～2日、全労協が第6回全国大会を群馬県の水戸温泉で開いた。この大会は郵政全労協にとって記念すべきものとなる。たしかこの前、郵政全労協が全労協へ組織参加登録をした。それまでは、各独立労組が別々に組織加盟をしていて、それぞれが大会に参加していた。

そして全労協の要請で郵政全労協として全国幹事を出すこととなった。郵政全労協が全労協に初めて認知された年ともなる。そして郵政全労協は東京の横山喜一さん(東京貯金)を全労協の常任幹事に出すことに決めた。

全国大会には私と横山さんが参加し、役員選挙立候補受けつけとなった。選挙では、一万人以上の五つの労組の推薦が必要との規約で、この推薦労組集めができていなかった。私もそのことを知らなくて、事前の準備もしていない。誰もお願いするつてがない。非常に困った。時間もない。

このときは広島池上文夫さん(全労協の幹事で福山現労委員長と市議)が私に声をかけてくれた。そして彼の奔走のおかげで、なんとか推薦労組が集

まり、横山さん(郵政全労協)は無事、幹事になれた。池上さんとはピースサイクルのとき広島で顔を合わせていた関係で、彼が郵政全労協のことを心配してくれたからだ。彼は郵政全労協にとっても世話になった人である。

2、全労協大会に連続皆勤の長崎

長崎(郵崎労と長崎全労協)は全労協の全国大会へ皆勤賞だ。89年の結成大会はまだ全労協でなかったから出席していないが、第2回以降は連続して出ている。90年7月5~6日に、東京駅・八重洲にあった国労会館で第2回全国大会が開かれ、長崎も2名で参加した。5月27日に郵崎労を作ってほぼひと月後、7月1日に全労協に加盟して、4日目のことだった。西も東もわからない。大会会場は国鉄闘争の熱気で、活気があり、大いに元気づけられた。

そのときは公務員部会などの交流会もあり、なにがなんだかわからないことや知らないことばかりで、驚きの連続だった。周囲の代議員も知らない人ばかりで、心細い大会参加だった。そのころは「長崎の郵政です」と自己紹介すると、みな「全通?」と聞かれる時代だった。

その年以降の全国大会開催地は、東京を離れ、熱海か箱根などの温泉町となっていく。これまで長崎はずっと中島とほか1名が出ていたが、2015年の今年からは、郵政ユニオン長崎の高口美和子支部長が長崎全労協の代表として参加した。世代交代したのだ。

地方全労協は郵政ユニオンが多い。長崎全労協は議長で大会へ出るし、神奈川県共闘も竹内淳議長(郵政ユニオン)がいて、必ず大会へは参加していたが数年前に54歳の若さで亡くなられた。私も神奈川での追悼会へ出かけたが、残念であった。大阪は高橋伸二さんが長いこと事務局長だったが、体調を崩していまは交代している。広島県共闘は事務局長が郵政で上関さんたちがときどき大会へ参加する。静岡県共闘は、数年前は森下さんが全国幹事となって出ていたが、今年から鈴木英夫さんに交代した。こうしてみると、地方全労協は郵政ユニオンも結構いる。

3、全労協全国大会発言と郵政ユニオン

2015年の10月4~5日と全労協は第27回定期全国大会を熱海で開いた。今年の定期大会で郵政ユニオン関係の幹事は、中執で東京の倉林浩さんと静岡県共闘の鈴木英夫(郵政ユニオン)さんの二人が選出された。代議員は本部の日巻直映委員長が出た。長崎全労協からは高口美和子支部長が参加した。

大会議事での代議員の発言は挙手をして議長が指名する。だいたい二日間で20名ほどである。誰でも発言はできるが、つい数年前までは最初の発言者はだいたい国労と決まっていた。しかしそれが2012年から変わった。

郵政ユニオンと郵産労が組織統一し、郵政産業労働者ユニオンとなった年だ。その年の代議員は旧郵産労出身の廣岡元穂委員長だった。大会議長が「発言を求めます」と言って、廣岡委員長が手をあげた。大会議長が「はい郵政ユニオン」と言って、廣岡さんが指名された。私が知る限り、郵政ユニオンが最初に発言するのは初めてのことだった。廣岡さんの隣に座っていた私も驚いたが、幹事の倉林さんはわかっていたようだった。そして、去年の大会

では日巻直映郵政ユニオン委員長が冒頭に発言し、今年もまた日巻委員長が最初だったという。

郵政ユニオンが一番はじめ。これは全労協運動で全国を切り開く存在を意味する。93年に初めて郵政全労協として全国大会に登場して以来、役員でも、また大会発言でも、郵政ユニオンは、全国の認知するところとなった。それもこれも、毎年春闘でストを打ち、労働契約法 20 条裁判(均等待遇)を展開している郵政ユニオンの力を、全労協の仲間が評価してくれているからだと思う。回顧的だが、90年7月の第2回全労協大会と比べ、この光景は隔世の感だ。全国大会を皆勤してよかった。全逓を卒業して全労協をめざす。26年前の郵政ユニオンの決意。この到達地点にいま私たちはいる。

十七、ピースサイクル(PC)回想

1 ピースサイクル(PC)の始まり

1987年5月8日～10日の3日間、郵政全協は合宿を兼ねて、第3回総会を東京の代々木オリンピックセンターで開いた、このとき広島谷本さんが、私に「ピースサイクル(自転車)で広島から長崎へ走りたい。長崎は受け入れてくれないか」と要請された。私は「長崎には自転車などない」と極めて非政治的な理由で断った。その年の夏、広島は走らず、谷本さんは大阪との約束を守れず、頭を丸刈りにして謝り、責任を取ったということがあった。ひとえに長崎の責任である。

ピースサイクルとは86年の夏、大阪の豊中郵便局の7人(伴走も入れると10人)の郵便労働者が広島8/6原爆忌に向けて大阪から自転車で走ったことから始まる。全逓組織の運動ではなく、自主的な平和運動だ。2005年ころ、PC20年だったかで広島へ集まったおり、大阪の家門和宏さん(郵政ユニオン近畿で現本部中執)に「7人はだれだれか」と聞いたことがある。だいたい名前はわかったが、家門さんも「車で広島まで迎えに行った」と言っていた。20歳のころだったというが、彼もPC元祖10人衆の一人だった。ときを同じくして、横田反基地闘争を闘う多摩でも、この年にPCが動き出している。PCが東京、大阪、広島、長崎とつながる。もう30年近くも前のことである。

88年の8月、谷本さんに丸刈りまでさせてはと、長崎も心を入れかえて、ピースサイクルの広島長崎受け入れを決めた。広島の仲間が1週間をかけて長崎まで走る。長崎は九州の端、向こうから見れば入り口だが、関門海峡の門司まで15人ほどが出迎えに行き、自転車で長崎まで約200キロを広島と一緒に走った。これがピースサイクル広島と長崎の歴史の始まりである。

2 ピースサイクルと全逓

88年、全逓本部はこのPC運動を「組織破壊運動」として、全国の各地区、支部にPCへの非協力を指令する。当時、全逓には被爆協があった。87年が長崎で、88年が広島で総会があった。広島の被爆協代表は吉井信夫さん(のちの広中労委員長)だった。彼はこの被爆協の総会で、PCへの全逓本部の非協

力指令について質問をした。本部は「平和運動はいいが、PCは組織破壊であり、全通運動とは無関係」と驚きの返答をした。

89年、長崎は初めて広島から長崎まで走った。15人ほどだったが、8月8日の長崎原爆忌の前日、長崎・諫早の高来町の湯江、轟の滝キャンプ場の山にPCが上った。長中支部組合員と家族など100人近くがこのキャンプに参加し、一泊二日の交流・懇親、学習会を開いた。いま郵政ユニオン長崎の事務所に大きな写真が飾られているが、いまは亡き、岡記念館の岡牧師の「先の大戦での日本のアジア戦争加害責任」の講演を受けた。それまでは原水禁などでの被害者の平和運動と考えていた私たちは、「日本人は加害者」と指摘され、意識が大きく変わった。岡さんありがとう。

この年はすでに広島原水禁は、全通本部の圧力でPCを受け入れていない。しかし、長崎は県評の矢島事務局長(全通出身)が全通の圧力をはねのけ、長崎原水禁の全体総会にPCを受け入れてくれ、壇上で紹介し、アピールもできた。長崎中央支部も長崎地区本部から「PCは認めない」と警告を受けていた。

全通中央本部から見れば、郵政全協が全国大会で中執選挙に対立候補を立てた。PCも反乱分子的存在に見えただろうが、まだみんな全通労働者だったのだから、なにもそこまでと感じた。平和運動を弾圧するとは、情けない。労組としてはあるまじき行為であった。

十八、郵政全労協議長と事務局長

1、議長職について

組織のトップ＝議長は看板である。それなりのものが求められる。

郵政全労協(1991～2004年まで)から郵政ユニオン(2004～2012年)の21年間で議長と委員長は8人だ。初代の長谷川さんは2期、2年、中島は3期、3年である。どんなに小さい組織でも、労組である限り、働く現場の個人の命と権利を守るために、闘いや日常の実務はみな同じだ。全部トップの肩にかかってくる。専従職でもなく激務であるから、草創期の大半のトップは体調を壊す。全国議長とはそうしたものだ。

ちなみに、歴史本なので、歴代の議長と事務局長を紹介する。

郵政全労協(1991～2004年までの13年間)

議長	事務局長
1) 長谷川讓(宮城県、郵政合同)	1) 齊藤明男(東京、郵政ユニオン)
2) 中島義雄(長崎市、郵崎労)	齋藤明男(")
3) 谷本大岳(広島市、郵広労)	2) 棗棠 浄(東京、郵多労)
4) 高橋伸二(大阪市、郵自労)	棗棠 浄(")
5) 三木鎌吾(兵庫県、兵庫連帯)	棗棠 浄(")
6) 棗棠 浄(東京、郵多労)	3) 松岡幹夫(大阪、郵大労)

2004年6月5日に解散大会。

これからは郵政労働者ユニオンとなる。

2004年6月6日に結成大会。2012年6月30日に解散大会。

(2004～2012年6月30日までの8年間)

- 1) 内田 正 (東京、小石川)
- 2) 松岡幹夫 (大阪、豊中)
- 1) 松岡幹夫 (大阪、豊中)
- 2) 須藤和広 (東京、麻布)

もともと、郵政全協は 1000 名を公称し、全国の郵政労働運動へ登場していた。その最中に労働界再編が起き、全通からの独立労組か否かで分岐を経験する。無論リーダーは、東京の吉野さんと広島中郵の伊達支部長であった。しかし、組織事情は全国各地さまざま、90 年ころの独立労組の結成に時間差が出た。結果的に、再編に呼応して一番早く労組を作った仙台の郵政合同の長谷川委員長が、郵政全協の初代議長を引き受け、組織を支えていただいた。実直な性格と物静かな態度には、組織の信頼が高かった。

そこで、かえすがえすも残念なことは、全通広島中郵の独立労組の結成が遅れて、91 年 6 月の郵政全協結成に間に合わず、伊達支部長を郵政全協の看板(議長)として登場させることができなかつたことである。歴史に「もし」があるならば、であるが、91 年 6 月に、全通広島中郵支部の伊達支部長をトップに、郵政全協の旗が立っていたならば、組織実態はもう少し変わっていたに違いないと思うからだ。

当時の全通では六大中郵支部(東京、大阪、名古屋、京都、広島など)の力は大きかった。そのことから郵政全協旗揚げのとき、この特大中郵クラスの支部長の有無が、その新組織の実力を計るバロメーターだった。

私が聞く限りは、前期の郵政全協には、支部や地区、地本役員の幹部クラスが幾人もいた。88 年の郵政全協の幹事会では、支部の三役クラスをもつ拠点支部は 25 だと報告されている。しかし、組織決断がぎりぎりに迫れば、全通からの離脱は困難になる。事実、長崎でも、郵政全協長崎の指導部のトップ(労組専従者)は、結果的に独立労組への参加はできなかつた。これはいづこも同じ状況だと聞いている。

結局、91 年 6 月の郵政全協の結成時に、中郵の支部長経験者は長崎だけとなってしまった。長崎という 300 名しか組合員がいない小さい支部でも、中郵支部となれば、看板の見栄えがいいことから、結成時に私は副議長に推され、2 年後には議長となり、非力のまま組織のトップとしてかつがれることとなった。長崎中郵の支部長でなければ「どうだったか」と回想している。

2、事務局長次第の組織

組織の隆盛は事務局長の存在が大きい。内閣すら官房長官次第とされるほどだ。わが郵政全協も同じだ。

1991 年 6 月に発足した郵政全協は 2004 年の全国組織統一の郵政労働者ユニオンになるまでの 13 年間である。議長が 6 人なのに事務局長は 3 人である。分けても初代の斉藤明男さんは郵政全協の草創期をしっかりと支えていただいた。彼の任期では議長が仙台と長崎の間の 5 年間であり、定期的な会議もせいぜいふた月に一度程度で、顔すら合わせられない。携帯電話もないころだ。資料も FAX か郵便では意思の疎通も欠く場面も多かった。だいたい議長などはいいい加減な人も多い(私のことだが)。組織の NO2 としてはじつと耐えての仕事だったと推察する。苦労は事務局長、手柄は議長という組織

は、どこも同じだからだ。私もずいぶん斎藤さんには面倒をかけた。礼。

2代目の棟棠さんは事務局長と議長を12年間も続けられた。並みの神経と体力ではなかったと思う。再雇用（継続雇用）を5年されて、今年3月に退職をされた。今後は脱原発の事務局やシルバーの仕事と郵政ユニオンの事務所スタッフもかけもちだ。彼には苦勞をかけたまま、今日に至っている。私自身、郵政全労協、4・28、国鉄闘争と、いくつもの分岐のときに、彼の言葉に強く影響を受けたと感じている。本史を借りて、慰勞を行いたいと思う。

十九、いくつかの思い出

1、郵政全協の4人組

実は郵政全協にも4人組がいた。この組織の全国化には、東京の4人組の存在が一番大きい。4人組とは、当時の中国の文化大革命時に使われた指導部の4人からきた異称だ。別に他意はないが吉野、斉藤、横山、棟棠さんらを指して、いつのころからか、4人組と呼ぶようになった。名付け親は今となっては定かではないが（多分こうした横着さは長崎ではないかと思うが）この全国運動を多様な視点でリードし、しっかりとした組織へと育てたのは、この4人組の優れた才能のおかげである。その後、この4人はそれぞれに活動の場を移し、市議会議員とか地域ユニオンとかに転じられたが、いまだ健在である。79年当時、それこそ、どこの誰だかもわからないまま、多くの政治潮流が跋扈（ばっこ）するなか、全国の活動家を上手な手綱さばきで動かし、総体として「新たな運動を」をめざし、今日の基礎を築かれた4人組に、あらためて感謝と敬意を表したい。

2、谷本大岳さんのこと

郵政全労協第3代目の議長が谷本大岳さんである。全通広島東支部の支部長だった。郵政全協から郵政全労協へ。このときの長崎の頼りは広島東の谷本さんであった。その後もほとんどの全国オルグは彼のお声がかかりで、私は各地へ出かけた。彼の行動力が私を全国へと動かした。またいくつかの会議の中でも、彼の言葉が胸に響いた。「広島と長崎は兄弟」という熱い言葉は、長崎の全協を支えた。ありがとうと思っている。

3年ほど前、会社を定年され、第二の人生を沖縄の宮古島と定められた。沖縄へ渡ると聞いて、広島の伊達工さんと東京の名古屋哲一（4・28原告）さんと私の3人が、谷本さんご夫婦の送別会を広島で開いた。そのときは漁師だと聞いていたが、いまは沖縄の闘いにどっぷりとつかり、今年2月、辺野古の闘いで沖縄県平和センターの山城さんとともに、米軍基地侵入で逮捕された。6月には不起訴となったと本人から聞いたが、連日忙しそうであるちなみに実名は地元の新聞では出たそうでOKだという。

キューバで革命を成功させたゲバラは、次の闘いを求めてかの国を去り、そして新たな戦いのなかに殺される。革命の英雄だが、2012年の郵政産業労

働者ユニオンの統一の旗を振り、その到達に安住せず、次なる闘いの場を沖繩に求める人生は、なかなかできない。

3、民主とはなにか

郵政全労協内部で対立が続いた民主労組論での、「民主」とはなにかを示す、出来事を紹介したい。「郵崎労は民同(右派官僚だ)」という周囲の言葉への、私なりの一つの回答である。事実、もともと全通派であり、意識も行動も民同だったから、本当は言い訳となるのだが、このさい弁明したい。

全通が全国大会で連合加入を決め、89年11月21日連合ができた。全通長崎地区でも連合反対の長中支部へ厳しい非難の風が吹く。89年12月13日に全通長崎地区本部が、県内の支部長会議を開いた。地区本部役員7人と、各支部の支部長11人の計17人の会議であった。これは、連合反対の長中支部糾弾会であった。なにせ、反連合は私一人だったからだ。

私は「組織がナショナルセンターの所属を変えるときの選択権は個人にある」として「個人でも反連合」だが、組織としても「連合反対は長中支部大会の意志であり、今後も変わらない」と譲らなかった。地区本部と10支部の支部長は「長中支部の連合反対」をこもごも大会決定違反だとして批判した。

支部(私)はこの会議内容を全部記録し、二日後、これを「職場討議資料」として、支部の組合員の全員へ配布した。私は、会議の中でも「皆様のご意見はすべて組合員に伝える」と発言しており、開かれた組合の支部長会議としたいと思っていたからだ。地区本部や他支部はこのことに、また怒る。日ごろからの「連合には反対だが…」という人たちの、組織的本音が明らかになることを嫌ったのだ。

地区本部は長中支部の職場討議資料の文書配布を認めなかったが、支部は配布を強行した。いまも私の手もとに残る小冊子だが、私の反連合の気持ちを支えたものだ。いまはすでに黄色に変色した6ページの短い文書冊子ながら、大事な私の宝物だ。

労組で民主とは、「機関が組合員へ情報を正しく伝え」「各人が自主的に判断する」ことでの、「当たり前前の運動をする」ことだと思う。こうした開かれた組織実態から、当時、長崎全協が13名の数ながら、郵崎労に40名が参加したのだと思う。無論、職場では、50名近くの伝送便や労働情報の読者がいたし、そうした人々へ、連合問題で事実をその通り伝えることで、「反連合組織」への信頼を得たのだと思う。民主とは自分にもあるが、非民主と思える相手にも、なんらかの形でそれぞれにあるのだと思う。

4、郵政倉敷労組について

郵政ユニオンではないが、友好労組の倉敷の郵政倉敷労組(郵倉労)への思いである。ここは97年9月28日に23名でできた。全福郵労の兄弟組合であり、結成の趣旨も機関紙の創刊号に、「非民主的な連合全通に代わり、組合員一人一人の気持ちを大切にす運動をめざす」と書かれている。

2005年だったか、私がお阪ピースサイクルに参加したとき、岡山か福山あ

たりで郵倉労の方と一緒にになった。夕食の懇親のとき、少数派労働運動の全国情勢認識で、私がおの方に「きつく」言ってしまった。同席していた大阪PCの家門、小田、山下さんらが心配し、彼をかばい、「そこまで言わなくとも」と、私を諫めた。

ところが、その後、その方から、「郵倉労で講演をお願いしたい」と手紙をいただき、民営化だったかの話をして倉敷へ行った。それ以来、組合結成10周年とか、郵倉労大会だとか、またその方の退職慰労会だとかで、3~4回ほど倉敷を訪ねている。人の出会いの妙を感じている。一昨年か、郵政ユニオンとの統合の話聞いたが、現在は共同闘争にとどまっているようだ。

少数組合の未来は「全国性・継続性」にかかっているという私の思いでいえば、郵倉労も結成や歴史の違いを超えた視野と、闘う労働者の統一という一点で、今後を選択されたら、などと勝手に考えている。

5、郵産労のこと

この歴史本は全労連のことに触れていないし、郵産労にも言及していない。全労協が非全労連で距離を置いてきたからで、郵政全労協も同じだ。同じ郵政の職場ながら、発足の過程も異なり、共同の闘争もなかったことで、私は記録を持たない。だから統一労組懇もありかた懇も全労連もわからず、歴史も書けない。

郵産労は1982年6月12日の郵政産業労組結成(51名)から33年の歴史を持つ。彼らも記念誌は出していると思うが、私は見たことがない。そこで一つだけだが、92年ころ、私の手もとのあるメモでは、郵産労は全国88支部の2300人とあり、私たちの組織数の10倍をはるかに超えていた。

統一後、旧郵産労の方から聞いた話だが、組織数の過去最高時は3500名だったという。九州レベルでも、89年の再編時に、福岡貯金や福岡中央局で20人を超える数で郵産労の旗が立ち、長崎でも北と中央で10数名の郵産労がわずか一年でできた。勢いがあったのだ。(詳細は彼らの文書を参照されたい)。

二十、全労協と今後の諸問題

1、全労協の運動と明日

わたしたち独立派が全通を卒業した(事実経過は脱退ののちに除名)理由は、全労協へ参加するためであり、協調派連合の運動では未来がないと思ったからだ。そして26年がたった。国鉄闘争が終わり、全労協も一つの役目を果たしたが、存在価値はいま一つだ。組織も発足後(公称50万人)から、国労の組織数減などにより減り続け、実態は10万人くらいの状態だ。

日本のナショナルセンター三鼎立時代に、日本はあっという間に非正規・期間雇用労働者が4割になり、格差社会が到来した。これは協調派連合だけではなく、私たち自身にも責任がある。労働運動もこのままではいけないと誰もが思うが、次の手がなかなか出ない。残るは自己変革ありきだ。またナショナルセンターも再々編され、闘う人たちの統一が必要だ。

労組が協調派であっても、職場では会社と労働者の基本的対立は変わらない。矛盾の原点だ。まして現代は社会の1%の富裕層が90%の富を独占する原理資本主義=強欲な新自由主義社会である。闘いもなしに労働者の利益配分も上がらない。こうした労組の闘いの原点はストライキである。労働条件に不満ならばストをするしかない。これが労働者を鍛え、強い労働組合を作り上げるのだと思う。この郵政ユニオン運動が闘えているのは、私たちが所属してきた全労協のおかげであることは論を待たない。しかし、それだけではいかにも非力だ。ナショナルセンターの再編を模索するゆえんだ。いま新労組=郵政ユニオンは、全労協と全労連の両方に加入している。統一の橋渡しになればと思っている。

2、郵政ユニオンの組織統合と次への挑戦

この項は、歴史ではなく、現代の状況に対する私見である。

2012年7月1日、全労協・郵政労働者ユニオンは全労連の郵政産業労働組合と組織統合をした。労働界でも普通にはあり得ない組織統合に、驚きの声が上がった。全労協も郵政全労協も基本が反連合、非全労連だったからだ。私も新労組結成当日、その会場で幾人の方から「大丈夫か」といわれた。

統一に対しての評論はあまり見ていないが、労働情報・編集委員(水谷研次さん)がブログで「連合ではなく、全労協と全労連とのように上部団体の違う労組同士の組織統一は例がなく、日本の労働運動へ一石を投じることだ」と書いておられる。

この統一には組織内部も異論があったことから、私は郵政労働者ユニオン長崎の機関紙「未来」に、「組織統一が目指すもの」を連載し、統一の成功を願った。また同文を「地域と労働運動」の2012年8月号に寄稿したおり、同誌の編集長の川副詔三さんが感想を書かれた。彼は「統一を危惧しつつも...」、「組織統一は組織の自主権である。新郵政ユニオンよ、がんばれ」というものだった。(正確には同誌を読まれたい)。

さらにその川副さんらが国鉄闘争終了後に出された総括本(What Was 国鉄闘争~そして次へ~)のなかで、小野寺忠昭さん(元東京地評オルグ)は、この郵政の統一への危惧を具体的に述べておられる。以下、「私は統一に反対の意見だった。その理由は、悪しき公務員大労組と正社員労組の体質に引きずられ、内向き企業内主義となることの危惧と、共産党系というセクト主義への対応」などを指摘されている。これが一般的だろうが、逆に言えば、その克服こそが統一成功の道であり、こうならないときは、統一は失敗となるのだろう。

そして3年がたった。現実、統一は失敗という意見も聞く。旧ユニオンが結成の原則、民主、自立、連帯という個の気概を見失い、中央集権・官僚的な労組へとなっているという心配だ。確かに旧郵産労は中執を東京が多くを占めていた。中央交渉力の維持と経費節減だと聞くが中央集権の典型だ。

しかし、旧ユニオンは中執の大半は地方であった。中央交渉だけに頼らない運動で、組織も経費もそれなりに維持できた。地方の個の力をばねに、全国が成長するという方式だ。もっといえば闘いの決定権はそれぞれの現場支

部が持つという考え方だった。これが旧ユニオンの原点である。数の比較はともかく、旧郵産労が組織遞減傾向にあり、旧ユニオンが組織増傾向にあるという違いの基本はここにあった。新労組には心すべき点だ。

そこでいうと、非全労連という立場も一方ではセクト主義である。今回の統一で私たちはこの壁を一つ乗り越えた。挑戦はすでに一つ成功している。プラス思考で事態を見るべきである。たしかに自分の思想性を貫き、自分の世代だけの少数派労組で終わっても、存在価値はある。だが労組はなによりも自分のためにあるが、また働く人全体のためにも存在する。その意味では少数派でも組織は継続性が求められる。生き残るために組織論は多様であっていいと思う。

旧郵政ユニオンは結成から 20 年を経て、指導部は革命世代から実務世代に変わった。組織の必然である。いつまでも革命世代では組織は破産する。歴史の教えるところでは、実務家は官僚化するという一点だ。新ユニオンは専従制度がなく、委員長も書記長も郵政の現場で働いている。役員も 5 年制だ。今のところ労働官僚はいない。

現実論だ。多数派公務員労組が問題なのは、国や自治体との協調主義である。民間大労組もそうである。私たちは絶対少数派であり、なかには非正規労働者が高い比率で加入している組織であり、現段階では協調派になる気配はない。しかも闘っている課題は、非正規労働者の復権、労働契約法 20 条の均等処遇の闘いである。正社員の権利問題だけではなく非正規の復権が柱だ。

裁判もあり、大衆闘争もある。方向は間違っていないと思う。私たちは組織統合を 5 年間討議し、4 度のストライキをともに闘い信頼を重ねた。それが現段階の統一郵政ユニオンである。

労組は働く人を守らなくてはならないし、闘いにも勝たなければならない。弱い者が強い相手に勝つためには、いままで通りにやっけてはだめである。弱い人は集まるしかないのだ。これが闘いと組織の原則である。

だが、私たちの先輩、60 年～70 年代の人たちは、内部のわずかの違いで対立し、さらに少数派に転落し、組織内外の信頼を失い、一層非力となっていた例が多い。組織と運動の再生のためには、意識を変え、組織を変え、闘い方を変えるしかない。私たち郵政ユニオンは相手がセクト主義だから統一しないのではなく、まずは挑戦したのである。こんな乱暴な組織統一を第二世代の実務世代が成し遂げたのである。官僚主義ではこうした発想は出ないし、踏み切れない。前に一歩進んだ力を、次の挑戦へ向ける。これがいまだ。

2015 安保闘争を機に、政治の世界では、民主党が共産党と選挙協力を話し合う時代である。今後は不透明だが、全労協と全労連と連合がともに「同じ候補者」で闘うしか、次の参議院選挙で安倍・自民党には勝てない。これが頭では分かっているが、勝利のために行動しないのは正しくない。

そのためには困難だが労働界でも、新しい酒は新しい酒袋へという選択も必要となろう。したがって好き嫌いではなく、勝つための運動論と組織論なのである。ほかの労組もこの組織統合の歴史に挑戦してほしいと願う。

二一、おわりに

1. 転向論の反省。

91年6月9日、難産の未誕生した郵政全労協であったが、その後もさまざまな困難が待ち受けていた。一口で言えば、数的にも政治的にも「問題外」の組織であった。理由はたった一つだ。全国で集まっても200人という極少の組織に、全国組織としては相手にもされなかった。だが、とにかく郵政全労協は生きていかなければならなかった。つきつめていけば、労働界再編で全労協をめざす。このためには、独立労組しかなく、結果の数ではなく、目的の正当性を訴え続けた。当時の主張の趣旨は、「みんな反連合だったでしょ。それがいつの間に連合になったのですか」ということで、これを「現代の転向だ」と私がいった。

しかし、これが大変だった。回り中を敵にする重大発言だった。自らの正当性を唱えれば唱えるほど、反対派から反発が強まる。所属していた全通は当たり前だが、全通内の良心派からも、地域の共闘組織（地区労や県評）からも「許さない」と批判された。

また全国的にも諸党派の多くが、「郵政全労協は間違い」と機関誌などで批判を強めた。それどころか自らの仲間と思う「労働情報」や「伝送便」のなかにも、「郵政のミニ組合は分裂主義」とか、「独立労組より全通の活動家集団だ」といった、郵政全労協の組織論そのものを否定する記事もでた。まさに鬼っ子の郵政全労協だった。このころの苦しさは葛藤はいまも私の心に、深く残る。

この2015年3月、私は「長崎の信徒発見150年に『転向論』を考える」という小論を、月刊誌「地域と労働運動」に寄稿した。簡単にいえば、「隠れキリシタン信者はみんな踏み絵を踏んだ。心の底で苦しみながら260年間もキリシタンとして生きてきた。この耐えしのぶ力が信徒発見につながり、世界の奇跡と評されている。それを、踏み絵を踏んだから『転向だ』と指弾したのは、長い歴史を見ない論であったし、「連合問題での転向論も短慮だった」という思いからの、全国へ向けての反省のメッセージだった。

とにかく、四面楚歌で生きてきた25年間だったが、郵政全協で「全労協へいこう」と固く誓い合った仲間たちの大半が、時間差はあったが、郵政全労協（郵政ユニオン）に結集できた。

いまは郵政ユニオンも周囲から「頑張れ」と励まされている。その最大は、反対派の少数組合が、結成以降25年を経て、元気に闘っていることを周囲が評価したからだと思う。全体でいうなら絶対少数であることは変わらないが、企業内のみにみれば、非正規の期間雇用労働者のいくつかの闘いで勝ち、存在感もある。いきなり過去の対立を水に流すことなどとても不可能だが、ともに闘うことで、さらに全体の結集をめざしたい。

2、長崎の運動から、再度。

70年安保のころは、闘えば新しい時代がくると信じ、また闘う大義も喜びもあった。長崎の状況を書けば、全通長崎中央支部では処分は労働者の勲章だった。わずか300名の支部の10年間で、刑事弾圧3回、逮捕13名、刑事裁判2件、民事裁判(被告)2件、人事院闘争2件、免職7名、停職18名など被処分が1200名も出た。

いまふりかえれば驚きだが、弾圧はわが支部だけでなく、長崎県下(11支部)でも4つの支部で逮捕や免職が起きている。全国も同じだったと思う。78年の反マル生越年闘争はこの力で闘われたのだ。彼らはみんな郵便局の普通の労働者だったが、郵政のマル生攻撃(生産性向上、思想改造)での全通解体・全郵政育成の差別的労務政策に怒り、これを変えたいと思った人たちだった。しかし、乱世は組織再編や人の離合集散も常で、勝ち負けは時の運だ。だが乱世だからこそ、平家物語にいう「盛者必衰」で、もう一度だ。歴史と闘いは必ずくりかえす。

3、闘う労働者として。

若いころ、生涯、全通と信じたその組織もいまはない。連合とともに権利の全通は滅んだ。なぜか。それは全通が過去の自身への被差別を、現代の非正規労働者などに転嫁することで、自分の身の安全を保ち、結果的に差別の側に転じたからに他ならない。しかし彼らの子供世代も二人に一人は非正規労働者だ。矛盾は現に存在し、危機の根はさらに深く、闘い以外にこれを変えることはできない。現に50数年前、全通は非常勤本務化闘争をストで闘い、2万人の本務化を勝ち取った歴史を持っている。権利の全通たるゆえんだ。

1978年当時、この全通の右への流れを見た人たちが、全通に代わり闘う組織(全活連~郵政全協~郵政全労協~郵政ユニオン)を立ち上げた。いまその組織が、社会の基本矛盾=非正規の正社員化を要求し、ストで闘っている。権利の全通魂を受け継いだのは郵政ユニオンだと断言できる。

歴史の転換点で次の時代の扉を押し開けるのは、いつも若者の勇気と闘いである。その教えは「正義は少数派にあり」で、闘いは一人より始まる。

若者たちに再編時代の少数派=郵政全労協(郵政ユニオン)として、いまをふり返り「われわれはなにものか」を確認し、ともに闘い、明日を共有するために、この歴史本を手にもしてもらえれば、幸いである。

4、最後に。

冒頭にも書いたが、「ともに全労協へ」の志を同じくした仲間が、結成以来26年で、数多く亡くなっている。結成の合言葉は「目指すぞ1000名」だった。これは、2012年の統一でクリアしたが、旧郵政ユニオンだけでいえば、いまだ道半ばだ。そこで、

「全労協 わが人生の 道しるべ 活動家たれ 一味同心」の歌を彼らに送り、追悼と、彼らの分の志も受け継ぎ、この運動へまい進したい。

おわりに、郵政シルバー・ユニオン長崎の中島としてこれを書いた。ところで、こうした歴史本はときとして反発やマサツが起きる。歴史は必ず二面

性を持つからだ。またわずか 20～30 年ほど前のこともあり、実名も多くある。ご迷惑をおかけするが、関係者にはお許し願いたい。(了)

2015 年 9 月 29 日

郵政ユニオン長崎、中島義雄

1969 年 9 月 29 日、全逓長崎中央支部の反マル生「150 日闘争」、6 名の免職処分の 46 回目の記念日に、熱い思いとして全国へ送りたい。

引用した資料本

- 1、少数派労働運動の軌跡(1986年)・・・編集委員会編・・・柘植書房
- 2、右翼労戦統一反対(1981年)・・・樋口篤三・・・柘植書房
- 3、全逓広島中央支部小史(1985年)・・・全逓広島中央支部
- 4、全逓長崎中央支部史(1985年)・・・全逓長崎中央支部
- 5、全福岡郵政労働組合結成 20 年誌・・・全福岡郵政労働組合
- 6、スト権奪還(1975年)・・・全逓信労働組合教育センター
- 7、全逓闘争小史(1971年)・・・全逓信労働組合
- 8、全逓九州労働運動史(1986年)・・・全逓九州地方本部
- 9、はがき無宿(郵政マル生の内幕)(1979年)・内藤国夫・・・毎日新聞社
- 10、郵政マル生の実態(1979年)・・・吉留路樹・・・二月社
- 11、権利のための労働法・・・青木宗也、中山和久・・・法政大学出版社
- 12、社会労働運動大年表・・・法政大学、大原社会問題研究所編
- 13、連合の誕生(1989年)・・・藤井昭三(朝日新聞記者)・・・労働旬報社
- 14、国鉄闘争～そして次へ～(2013年)・川副詔三ら・・・ぶなの木出版
- 15、全逓左派闘争宣言(1986年)・・・郵政全協・編・・・柘植書房
- 16、月刊「伝送便」・・・郵政労働者全国協議会(郵政全協)機関誌

編集後記

「郵政全労協結成前後」の歴史本に初めて挑戦した。全国の歴史となるとやはり荷が重く、結果はやはり、ローカル(長崎)かつ、私的な歴史となったことから「外史」とさせていただいた。ご容赦願いたい。

最後だが、本「外史」の目的を「郵政全労協の結成前後」と題したことで、記事が限定された。不足部分は以下だと思う。

- 、50年代からほぼ10年～20年おきにかけてられるレッドパーズ。これとの闘いと労組の立ち位置の整理。
- 、70年代、右派連合の台頭から自立した運動を目指した人たちと全労活運動の分岐やその後。
- 、80年代からの国鉄闘争と、鉄建公団訴訟原告団の闘い(国鉄共闘会議)と、全労協や国労との関係と現実。
- 、89年の労働界再編前後の全労連(郵産労)の流れと、2012年の郵政ユニオンの組織統一時の現実論議である。

これらは別の機会にそれぞれの歴史本として書くしかないが、正直、私の力を超える。次の世代への課題として、バトンタッチとしたい。

本小史作成にご協力いただいた皆様に感謝したい。それぞれの地区で、それぞれの歴史を書き加えながら、「外史」が正史になることを、心より願う次第である。
(長崎・中島義雄)